
殺人教会の死神様

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人教会の死神様

【Nコード】

N4362Y

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

教会と呼ばれる宗教団体。だがその正義は殺人によって成り立っていた。死神と呼ばれる武力団体を抱える教会は世界に多大な影響を与え、時には国を滅ぼすほどの力を持っている。対して教会の正義を許さない対抗勢力もまた存在し、抗争を続けていた。主人公カールシアもまた死神と呼ばれる一人であり、教会の命に従って、自身と教会にとっての悪と対抗勢力を排除するため旅を続けていた。

01 カルシア（前書き）

お気に入り登録や評価をしてもらえたら幸いです

01 カルシア

その森は昼だというのに、ほとんど地面まで光が届いておらず薄暗い。

時々周囲から風も無いのに木々がガサガサと揺れ、狐やウサギが飛び出し、ここが弱肉強食の世界だと周囲に教えてくれる。

風が吹くと森が揺れ、暖かな陽が差す。

自然そのもののようなこの森に一人の男が迷い込んでいた。

彼の名前はカルシア。

精悍な顔つきをしており、鋭い緋色の目は常に何かを警戒している。

すでに迷ってから七日が経ち、その精悍な顔には僅かに怒りの色が浮かんでいた。だが疲れは一切窺えない。

全身を覆うぼろきれの様なマントから、彼が非常に長い旅を続けていることが分かる。

一方で手には何も持っておらず、旅慣れているようには見えにくい。

歩くたびにマントから背中の大剣と、なぜか右腰に差した刀が見え隠れする。背中の大剣は、彼が扱えるのかと疑問になるほど、でかい。

「いつそ森を焼き払おうか……」

物騒なことをボソリと口にするが、決してしないことも自覚していた。

「馬鹿なこと言っとらんでとっとと歩く」

無然とした声を出すのは、カルシアのすぐ傍を飛ぶ、人の頭ほどの大きさしかない、小さな真紅の竜。黄色の瞳は月のように、穏やかな光を持っている。名をミクリ。

何が気に入らなかったのか、カルシアはジロリ、とミクリを軽く

睨む。

視線を前に戻すと、ミクリの言葉に従ったわけでも無いだろうが、とにかく森を抜けるべく、カルシアは歩き続ける。

急ぎの旅ではないとはいえ、迷っているという事実がカルシアを苛立たせる。

草木を左右に分けながら、しばらく獣道を歩き続けていく。

段々と動物たちの声が聞こえなくなり、気温が少し下がったように感じる。空を見ると僅かに顔を出した空が、いつの間にか赤い。夜が近い。

しかし夜になろうが、カルシアは休むつもりなど無い。

とにかく歩く、歩く。

突然、止まる。

「どうかしたか？」

ミクリが怪訝そうに訊く。

「……人の声が聞こえた気がした」

「本当か？ それなら道を訊くのにならうだよいな」

ミクリは嬉しそうな声を出す、カルシアの表情は真剣だった。微かだが確かに人の声が聞こえた。かなり遠いようで、カルシアでなければ気がつかなかっただろう。――聞こえた声は悲鳴だった。耳を澄まし、神経をさらに尖らせる。

――喧騒が聞こえ、気配も感じた。かなり遠い。

数は四人。声からして一人の女性を、他の三人が襲っているらしい。

声の質からしたら、女性というよりは少女かもしれない。

彼ら四人がいる方向を睨み、すぐに走り出す。その速度は道の無い森の中とは思えないほど、人間離れした速さだった。

カルシアの慌てた様子に、ミクリもようやく異常を感じて、後ろからついていくが、たちまち大きな距離が開いてしまう。

「やめて！ 離して！」

間もなくはっきりと、女性の悲鳴が聞こえ始めた。それと共に男達の下品な笑い声も聞こえる。

遠くに声の主である四人が見えた。広場になっているのか、赤い夕日が微かに差し込んでいる。たちまちに彼女らの姿が大きくなっていく。

あつという間に近づいていき、最後の一步を大きく飛ぶと、森をくりぬいた様な空間に出た。広場と言えるほど広くは無いが、だからといって狭くもない。

そこにはやはり三人の男が、下着姿にされた少女を襲っているとこらだった。驚いたことに少女は獣人らしく、犬耳と尻尾をつけている。

顔が油でギトギトの男が少女に覆いかぶさり、残り二人が左右で嫌な笑みを浮かべていた。無理矢理脱がされたい服が傍に落ちている。

突然現われたカルシアに男達が一斉にこちらを向く。

一瞬驚いた表情を浮かべたものの、すぐに気を取り直し、左右にいた男達が招かれざる乱入者を排除しようと歩み寄る。

「ここは今取り込み中だ。お前は何も見なかった。いいな？」

痩せた男が腰の柄に手を乗せながら威圧する。

もう一人の筋肉質の男はニヤニヤと嫌らしい笑いを浮かべ、うんうんと頷く。

「……悪いが、そういう訳にもいかん」

ようやく追いついたミクリが、多少息を切らせながら、きっぱりと断る。

再びの乱入者である、ミクリを見た男達二人があからさまに固まる。未だミクリに気がついていないのは泣き叫んでいる獣人の少女と、覆いかぶさっている油顔の男だけだ。

「お前、協会の人間か！」

その叫びにも似た確認で、油顔の男もハッと顔を上げた。そこにはありありと恐怖の色が浮かんでいる。

「ミクリ」

カルシアが相棒の名を呼ぶ。

「記録した。もう構わん」

何を、とは聞かない。そんな必要は無い。もう何度もやっていることだからだ。

宣告にも似たミクリの発言を聞き、二人の男が体をビクつかせる。油顔の男も怯えた表情を浮かべたところを見ると、彼にも聞こえていたようだ。

彼らの様子など知ったことではないようで、カルシアは厳格な声で告げた。

「それでは刑を執行する」

「何言って――」

強張った顔をした痩せた男の言葉が途中で途切れる。

いつの間にかカルシアの左手には、黒い刀身の刀が握られており、左上に剣先を向けていた。

筋肉質の男はカルシアが刀を抜いた瞬間が見えず、ただ瞬時に立ち姿を変えてしまったことで驚き、次に、握られた怪しく黒光りする刀を見て後ずさる。

「て、てめえ！ 何のつもりだ！」

声を震わせながらも、必死に虚勢を張る。何のつもりかなど、彼も分かっているはずなのに。

彼の言葉を待っていたように、痩せた男がゆっくりと後ろに倒れていく。

地面に体が触れると、鼻から上が――外れた。

倒れる様子を、最初から最後まで見ていたもう一人の男は、放心したように二つに分かれた相棒の顔を見ていた。

自失状態から立ち直り、カルシアに向き直る。

直後にヒュッという風を斬る音。

筋肉質の男は糸の切れた操り人形のように膝を折り、崩れた。すぐに血の水溜りが出来ていく。

カルシアの刀身は右下へと移動していた。行動の一つ一つが、常人には見ることもさえかなわない。

「……もう一人はどこにいった？」

カルシアはいつの間にか消えた油顔の男を目で探す。

「ワシに気付いたとたん、その子を放って逃げおったわ。お主なら気配で読めるじやろうから無視したが」

カルシアが周囲を気で探ると、確かに男が逃げていくのが分かった。

「今から追いかけてもいいが……」

獣人の少女に目をやると、服を抱えて肩を細かく震わせている。

「放っておくわけにもいかないな……君は早く服を着るといい」

少女から目を離し、後ろを向く。少女とはいえ、いつまでも見られるのは気分が悪いだろうから。ミクリも彼に倣って顔を背ける。

背後で少女が動く気配を感じながら、刀を大きく振って血糊を落とし鞆に収める。

「もう、大丈夫です……」

弱々しい声が聞こえ、少女に向き直る。

改めて見た彼女は、将来を楽しみにさせる美貌を持っていたが、先ほどの恐怖で顔が引きつっていて魅力が失われている。

カルシアは勤めて優しく聞こえるように尋ねる。

「君の名前は？ 俺はカルシアでこっちの竜はミクリ」

「……リーラ」

「リーラか、いい名前だ。犬の獣人かな？」

「……狼です」

わずかにむっとして、訂正する。

「そうか、それは失礼したな。それでリーラは、こんな森で一体何

をしていたんだ？」

とたんにリーラの顔が悲しげに歪み、黙り込む。急かしたりせずに話し出すのを辛抱強く待った。やがてポツリとリーラが訊いた。

「……カルシアさんは協会の人でしょうか？」

「そうだ」

「……村を……」

「ん？」

何か言ったらしいが、声が小さく聞こえなかった。

「村を助けて下さい！」

リーラは悲壮な叫び声をあげた。どうにもならないが諦めたくない。そんな思いが籠っているようだった

02 リーラ

「とりあえず落ち着いて。話しは聞くから」

カルシアは興奮気味のリーラを落ち着かせようとするが、今度は泣き出してしまった。

小さな泣き声が、森が鈴かなだけに響く。

「リーラ、泣いとらんで事情を説明せんか」

困り顔のカルシアに代わって、ミクリが厳しい声を出す。この調子では話しがなかなか進まないの、ミクリの声が厳しくなるのは仕方が無い。

細かい事情は分からないが、リーラが襲われていたことから、その村に良くないことが起こっているのは間違いないだろうから。

自然とカルシアとミクリの気が急ぐ。

しばらくして泣き止み、ようやく落ち着き始めたリーラが、ポツポツと事情を話し始めた。

「……私たちの村はこの森を抜けて、すぐのところにあるんですけど、最近になって近くの廃墟に盗賊が住み始めました。その盗賊たちは、ことあるごとに私たちの村に、お酒や食べ物要求をしてくれました。……ですけど、とうとう耐え切れなくなって、有志の討伐隊を結成したんです……」

リーラがまた泣きそうな表情を浮かべて、カルシアは少し焦ったものの、泣くことなく続けていく。

意外にもしっかりした声だった。

「……全員殺されました」

「分かった。もういい」

沈痛な表情で話すリーラを遮る。

ようは報復されたということか。しかもこんな少女が、一人で森の中に逃げなければならぬほど切迫した状況になっている。

彼女の服は逃げている時に引っ掛けたのか、所々穴が開き、血が滲んでいる。

必死に逃げたのだろう。

——両親はどうしたのだろうか……

今更ながらカルシアはそう思った。最悪の想像が頭を過ぎるが、それをリーラに聞かせるのは酷だろう。

「道案内、頼めるか？」

カルシアが訊くとリーラは素直に頷いた。

気を広げても、あの逃げた男以外に誰も見つからず、村はかなり遠いらしい。にも関わらず、躊躇せずうなずいたのは、この辺りも遊び場なのだろう。

先に歩き出したリーラの後ろに続いていく。

「リーラの居る村というのは、獣人の村なのか？」

すぐ目の前を揺れる尻尾を見ながら訊く。小麦色の綺麗な毛並み。髪の毛も同じ色をしていた。

時々赤い夕日が当たって、綺麗に輝いた。

「私は養子だったから……」

「そうか。いい人たちなんだな」

あえて過去形にしない。

「はい、とても」

「……少し急ごうか」

「……はい」

すでに段々と歩く速度が速くなっていったが、さらに速度を上げていく。今にも走り出しそうなほどに。

——大切な人たちなんだな。

カルシアは自然と笑みがこぼれたが、村の現状を考えると心が重い。出来れば助けたいとは思うが、間に合うかどうか。……間に合わないだろうと思う。

未だに気を広げて周辺を探っているが、まだ人の気配がしないの

だ。

カルシアは死んだ人間の気配は探れない。

単に村がまだ遠いということだろうが、嫌な予感を拭う理由として足りなかった。

リーラの言う通りに、本当に村人全員が死んだとは、考えにくいこともある。酒や食料を提供するものが居なくなるからだ。

二人か三人程度を見せしめに殺せば十分はず。

だがこの少女が、一人で逃げているという状況が予断を許さない。

「カルシアさんは強いんですか？」

リーラが突然訊いてきた。

カルシアが何か答えるより先にミクリが口を出した。

「強いぞ、この男は。おそらくこの大陸の誰よりも」

自信満々に断言する。もしミクリが人の姿をしていたなら、胸を張って答えていただろう。

何が気になったのか、リーラが顔だけ振り向かせ、すぐにまた前を見る。

「……竜って喋れるんですね」

前を向いているため表情は分からないが、かなり驚いているようだ。襲われていたときは自分のことで一杯だったのだろう。あれからミクリは喋っていない。

対してミクリは憤然としている。

「人が喋れて、竜が喋れないとは思われとうないの」

「ご、ごめんなさい！」

根が素直なのか、すぐに謝った。

……素直というよりも、竜が怒ったので怖かったのかもしれない。「分かれば良い」

ミクリが機嫌よく答える。今の状況が分かっているのだろうか。

——こんな状況だからこそ、か。

「ミクリ……さんも強いんでしょうか？」

「ミクリでよい。……自慢じゃないが、ワシは弱いぞ。それこそお主にすら勝てぬほどにな」

本当に自慢にならない。

「それじゃもしかして、戦えるのはカルシアさんだけですか？」

足を止め、振り返る。その顔には不安がありありと浮かんでいた。

「そうなるな。何しろ戦いとなると、ワシは足手まとい——」

「それじゃ駄目です！」

突然大きな声を張り上げ、ミクリの体がビクツと震える。

夕日までが、彼女の声に驚いたように、雄大なその姿を完全に隠したようで、とたんに森の暗さが増す。

カルシアもどういふことかと、怪訝そうな目をリーラに向ける。

「私が頼んだことで申し訳ないんですけど、それじゃ駄目です……」

リーラ自身、自分の出した声の大きさに驚いたようだったが、構わずに続ける。

「相手は三十人以上いるんです。一人でなんて無謀です」

どうやらリーラはカルシアの腕を見込んだというより、竜の力を頼っていたらしい。

竜はどの地方であろうと、力の象徴に他ならず、小さくても強いと思い込んでいたのだろう。

カルシアは内心、「無礼な」と思いながらも笑顔を作る。

「大丈夫。ミクリも言ってただろ、俺は強いんだ」

「でも……」

「いいから。先を急ごう」

不安な表情は消えなかったものの、再びリーラは歩き出した。歩みは先ほどまでより遅い。

「心配せんでもよい。キリエミラ教会の死神だぞ？ 実力は折り紙つきだ」

「……死神？」

ミクリが慰めるように言ったが、リーラには分からなかったよう

で、小首を傾げている。

「なんじゃ、知らんのか？ 今時珍しいの」

ミクリが呆れた声を出す。

「教会は知ってますけど、死神は……」

カルシアの顔を窺いながら、不安そうに言う。

気を悪くした様子もなく、カルシアは気軽に教えてやる。

「教会は言わば、正義の武装集団だ。その中でも死神と呼ばれるのは精鋭だな。死神は小さな竜を連れているから、大抵すぐ分かる」

「そんなのがあるんですか。知りませんでした。それでカルシアさんはミクリを連れてるんですね？」

尻尾に引っかけた枝を払いながら言う。歩くたびに引っかけたて、歩きにくそうにしていた。

「ああ。……三十人程度は問題にならないから、そのことで気にすることは無い」

一応言い加えておく。

リーラは頷いたものの、本当には理解していないというのが、嫌でも伝わる。

三十人が問題にならない武力と言われても、ピンと来ないのは当然である。

「まだしばらくかかるのか？」

「はい」

随分と遠くまで逃げてきたらしい。

「なら死神について少しだけ話してやろう。どうやらリーラは俺の武力を疑ってるようだしな」

「そんなことは――」

「いや、いい。見てれば分かる」

否定しようとしたリーラを遮り、続ける。

「知らないなら仕方無いしな。キリエミラ教会というのは、人を殺すことによって世界に平和をもたらそうという宗教、というよりは

集団と言った方がいいかもしれない」

「聞いたことはありませんけど……そんなことが出来るとは思えません。殺人で平和なんて……」

教会の人間を前にして平気で口にする。

おかげでミクリの反感を買った。

「そんなもの、やってみなければ分からんだろう？」

「ミクリ、お前はいいから。この子の言いたい事も分かる」

「何じゃ、お主まで。ワシだけのけ者か？」

拗ねたような口調にカルシアは苦笑を浮かべる。

——口調は大人びていても、やはりまだ子供だ。

「いいから。今はそういう話じゃない」

「ふん」

ミクリはそっぽを向いてしまった。

あとでブドウ酒でも奢れば機嫌を直すミクリは放っておいて話を続ける。

「実際のところ、殺人を実行していくのは簡単な話じゃない。何故か分かる？」

リーラは少し考えて、

「国によって法律があるから？」

「そう。そしてそれを解消するには、基本的に二通りしかない。国を教会に取り入れるか、国にも簡単に口が出せないような力を手にすればいい。教会は後者を選んだ」

「国よりも強い力を手に入れたんですか？」

本当に驚いたようで、振り向きながら口早に訊く。表情は暗いが、黒い瞳が妖しく輝いていた。

「教会のトップ、教皇様がそういう力を手に入れたんだ。その力は他人に力を与える力、死神は皆、力を分け与えられてる」

「それが国に口を挟ませない力……」

「そういうことだ。だから安心していい。俺がどういう力を持っているかを、教えることはできないが、三十人程度は問題じゃない」

「教えることができない？」

「正確にはできないと言うより、したくないだな。重要なことだから」

「そう、ですか」

「……大丈夫、安心していい」

「はい……」

再び前を向いたため、リーラの表情は見えない。この話を信じたのか、はたまた信じていないのか。

だがどうでもいいことだ。この話しは真実なのだから。

03 村

カルシアが教会について話し終え、しばらくすると他の人間の気を感じた。

数はかなり少ない。が、盗賊たちの人数よりは多い。

「人が居るな」

「何人？」

「四十人ほどだ」

すぐさま反応したミクリに答える。拗ねていたくせに仕事はきっちりとなす。

「村の皆かもしれない……」

祈るような声音を出す。カルシアがどうやって人数を把握したかなど、思慮にも入っていないらしい。

「さてどうだろうな。村人と盗賊という可能性もある。先に村の外から様子を見るべきだろうな。村人というのはどれぐらいの人数だった？」

「皆と盗賊……」

リーラは絶句して、カルシアの質問は聞こえていないようだった。それはそうだろう。この二つが一緒になって、いい想像をしろという方が無茶だ。

それでも彼女は、元気の無い尻尾を振りながら前に進む。

「村にはどれぐらいの人がいた？」

再び同じ質問。

「……え？ あ、そうですね。大体二百人くらいだと思います」

リーラの話しが本当するなら絶句するのも頷ける。160人ほどが死んだ計算になる。

「……もう場所は分かる。リーラは待っていてもいいぞ？」

「そうした方がいい。お主の見たくないものもあるろう」

村人の死体。もしかしたらリーラの両親の死体もあるかもしれない

い。

だがリーラは気丈にも首を横に振った。

「いえ、私も行きます」

こちらを振り向き、しっかりした口調で言うが、リーラの顔色が悪い。

今にも倒れるのではないかと半ば本気で心配になる。

「そうか」

もはや引き止めることはしない。ここで待たせたところで確かに意味は無い。事実が変わるわけでもなく、不安を引きずるだけにしかならないからだ。

残りの距離を黙って歩いていく。

陽はいつの間にか暮れており、森に闇の帳が下りている。

生物の気配も消え、皆自分の家で休んでいるのだろう。

リーラは外から来た盗賊に村を目茶苦茶にされ、自分の居所を奪われた。もしかしたらこの子の親も殺されたかもしれない。

理不尽。

何故そんな理不尽が許されるのか。

いや、別に許されているわけじゃない。抵抗できないだけだ。したくてもできない。……それは苦しいだろう。

いつしかカルシアの中に怒りが渦巻いていた。「常に冷静沈着に」という彼の信条をあざ笑うような怒りだった。

だがそれを抑える。

怒りを無くすのではなく、怒りを冷静という名の仮面で隠すように、ゆっくりと抑えていく。

——怒りに飲まれてはろくなことになる。

彼は身にしみて、知っていた。

「あそこです」

リーラの声で村がもう目の前なのに気がついた。かなり怒りに駆られていたらしい。

すぐさまじつと村を見る。

「リーラとミクリは少し待ってろ、様子を見てくる」

二人の返事を待たずに行動へと移した。

森を抜け、すばやく村に近づいていく。一步近づくとたびに血の匂いが鼻をついて、カルシアは思わず顔を顰める。

村の側面から近づく。さすがに様子見で正面から近づいていく気は無い。

一軒の家に近づき、その家の裏から村の様子を見た。

ここまで来ると相当な血の匂いがして、鼻が麻痺しそうだ。

村は悲しみに包まれていた。

ついこの間まではのどかない村だったのだろう。一軒一軒が古いものの、人の生活感が漂っている。

近くの森も猛獣などおらず、申し訳程度の村を囲む柵を見ても、天敵がいなかったのが窺えた。

今は荒らされてしまっているが、村の外には大きな畑も作られていて、村で協力して暮らしていたらしい。

少し遠くには川も見える。村の位置を考えると近すぎるぐらいだが、氾濫もせず穏やかなのだろう。

普段は子供の笑い声の聞こえる、平和な村だったはずだ。

それが今、悲しみに満ちている。

女性のすすり泣く声、子供の泣き声、時々聞こえる男達の怒声。そして何かを引きずる音。

近くに人の気配が無いことを確認してさらに近づいていく。

女子供は身を寄せ合って悲しみにくれていた。

その横を死体を抱えた男達が通っていく。何人かは持ち上げることも出来ず、泣きながら引きずっていた。

広場のような広い空間にはいくつもの死体が並べられていた。

ほとんどの死体は切り刻まれていた。

女性の死体で服の乱れが一切無いのは整えたからだろう。こうい

う事件で強姦は普通のことだから。

「このまま泣き寝入りするつもりかよ！」

突然男の怒声が聞こえた。死体を集めていた一人らしく、広場にいたもう一人の初老の男に怒鳴っている。

「そんなこと言っても仕方ないだろう。……俺たちまで殺される」

「だからってこんな、こんな目にあって……」

最初に怒鳴った若い男の語尾が、弱々しく消えて泣き声に変わる。これは――怒声というよりも子供が泣き喚いているのに近い。

自分ではどうしようもないことが分かっている、言わずにはいられないのか。

「だからってあんな条件のめるかよ……」

弱々しいがはっきりと拒絶を示す。盗賊達が何か要求してきたらしい。

それで、これだけの人数が生き残っているのかもしれないと納得した。

「のまないと俺たちまで殺されるだろうが！」

若い男に初老の男が顔を歪めて反論する。彼にしても苦渋の決断なのだろう。

「そんなの、俺たちが逃げたらいいだろうが！」

「まだ若いお前はいい。だが他は？ 全員が逃げるなんて不可能だろうが！ 本気で逃げ切れるとお前は思っているのか！」

初老の男が怒鳴る。

若い男も黙ってしまった。お互いに無理を言っているのは十分分かっているのだろう。

とうとう若い男も黙って涙を流し始めてしまった。

カルシアは提示された条件を知りたかったが、これ以上聞いていても喋りそうに無い。口にするのを嫌悪しているようにも見える。とりあえず一番の目的である盗賊の有無は確認したため、カルシアはそっと二人の所に戻る。

リーナ達の所へ歩みを進みながらも気分は重い。

最初に全員殺されたと聞かされたよりも多くが生きているものの、かなりの人数が死んでいることに変わりはない。

だからといって嘘を言う訳にもいかないだろう。

リーナに何と言うか考えながら、急ぎ二人の下に戻っていく。

04 印象のズレ

どう話すかあれこれと考えながらも、すぐに二人が視界に入る場所まで来た。

向こうも気付いたらしく、身を潜めていた森から抜け出てやってくる。

「どうでした？」

不安顔でリーラが訊く。ミクリも表情は分かりにくいが不安そうだ。

カルシアは慎重に言葉を選びながら、

「村の状況はあまりよくない。だがやはり四十人ほどは無事なようだ」

「四十人……それだけでも助かってくれたことを、喜ぶべきなんでしょうね……」

リーラは目を閉じて沈痛な表情を見せる。

四十人も生き残っていたのか、四十人しか生き残れなかったのか。どちらにしても多くが死んだことには変わりが無い。

「村に何か要求もされたらしいな。詳しいことは分からなかったが、村人にとって辛いものらしい」

「要求ですか」

「何か要求されるような心当たりは？」

「いえ、そんなものは。私たちの村は特産品とかありませんでしたし、畑を作って細々と生活していたくらいですから。あいつらが何で村に来たのかも、分からないくらいなんです」

「それなら直接訊くしかないようじゃな」

ミクリに頷き、リーラの目を真っ直ぐに見る。

「村で辛いものを見ると思う。覚悟はいいな？」

カルシアの質問に、リーラはゆっくりと頷く。

「……分かった」

もはや待たせようとすることもなく、先を歩いていく。

カルシアの後ろをリーラとミクリが続いていく。

リーラは哀しげな表情を浮かべているが、これから直面するものを冷静に受け止めようとしていた。

今度は村の側面に回ることなどせず、正面へと向かう。

村に近づくたびにリーラの体が強張るのを、背中ではひしひしと感じていた。

村に入ると、何人かは明らかに怯えた目を向け、中には何とも言えない嫌な目を向けるものもあった。だが総じて声をかけてこないことは共通していた。

「……妙だな」

「妙とは？」

思わず口にしてしまったそれを、ミクリが聞きとがめる。リーラには聞こえていないようだった。これから見るものに思考が行っているのだろう。

リーラに聞こえないよう、少しでも距離をとりミクリに答える。

「怯えた目を向けられるのは分かる。俺たちは部外者だからな。盗賊の仲間かもしれないと怯えて当然だ」

「ふむ、確かにな。竜まで連れて怪しさ満点じゃからの」

あえてミクリは暢気な声を出す、カルシアの緊張がほぐれることは無かった。

「中には嫌悪の目を向けるものまでいる。そこまでは理解できる。だが誰一人リーラに声をかけないのは何故だ？ 彼女は部外者じゃない。しかも目立つ獣人だ、村人全員が知っていてもおかしくない」

「……確かにの」

ミクリは同意し、考え込んでしまった。

カルシアもまた考え込む。

村に入ってから死体の並べられた広場へ向かっているが、誰もリーラに話しかけない。彼女はまだ子供だ。せめて声をかけるぐらい

は普通するのではないだろうか。

そこだけがリーラから聞いた村の印象とズレが生じている。印象のズレ。

カルシアは直感として、それを嫌なものとして理解していたが、原因がさっぱりわからない。自分達が居るからだろうか、とも考えたがそれでもやはりおかしいだろう。

結局何か分からないまま、広場へと到着した。

綺麗に死体が並べられているのを前にして、リーラは立ちすくんだ。

「――っ」

リーラが顔を歪める。当然だ。ここに並べられているのは皆知り合いだろうから。泣きたいのか、叫びたいのか。

リーラは何ともいえない、苦しそうな表情を浮かべていた。

やがてふらふらと死体の間を歩いていく。一人一人の顔を確認しながら。

その様子を見て、ふと疑問に思った。

死体が明らかに少ないのだ。

「あんた、何者だ？」

突然背後から声を掛けられ、振り向くと十人ばかりが集まっていた。

「ただの旅人だ」

「ふうん……」

答えるのは先ほど来た時に怒声を発していた若者だった。態度はあまりよくないが、気の強そうな若者だった。

「リーラちゃんと一緒に居たな？」

「ああ。それがどうかしたか？」

訊くと、一瞬だけ視線を泳がせ、すぐにこちらを見る。

「……あんた、あの子を連れて逃げてくれ」

「おい、何を言ってやがる！」

若者の言葉に反応したのは、またしても先ほどの初老の男だった。慌てて若者の肩に手を置き、無理矢理振り向かせる。そのままカルシアから離れて、彼らを囲むように話し込み始めた。

カルシアとミクリは顔を見合わせる。どうも様子がおかしい。

「逃げると言われたの」

「だな」

「逃げるのか？」

「……それを聞くのか？」

ミクリが肩をすくめるような動作をする。

再び若者達の話し合いの方へと目をやった。

話し合いが終わるのを待っているうちに、リーラが青い顔をして戻ってきた。この時、確かに初老の男に困惑の色が浮かんできたのを、カルシアは見逃さなかった。

「お母さんが……」

リーラがそこで押し黙る。

「そうか……」

分かっていたことだ。だからといって悲しくないはずが無い。

カルシアもミクリもかける言葉を失ってしまった。予め考えていたのに。

ただリーラの頭に手を置いてやり、軽く抱きしめる。

すると彼女は声をあげずに泣いた。

ようやく落ち着きを取り戻し、カルシアから離れた時、

「リーラ……」

と初老の男が前に出て、リーラの名を呼ぶ。話し合いは終わったらしく、若者も開放されていた。

「お父さん……」

リーラが目を見開いて呟き、彼に近づいていく。最初の数歩は歩き、すぐに走り出し、男の胸に飛び込んでいった。

二人が抱きしめあった時には、少女は大きな声をあげ、泣いていた。「奴が父親じゃったらしいの……」

ミクリが呟く。

普通なら親子の再会と別れを思っ
て涙ぐむところなのだろう。だがカルシアはそういう気分にはなれなかった。

――先ほど見せたあの男の困ったような表情は一体……

こんな再会なら泣くか、喜ぶか。他にはこれに準じる表情を取るなら分かるが、困惑とはどういうことだろうか。

先ほどの印象のズレと相まって、余計に嫌な予感が募る。

それに今の父親の表情。

リーラからは見えていないだろうが、見ていて痛々しい表情をしている。――リーラが生きていたことで彼は救われていない。

05 村長の招待

カルシアは訝しく思っていたが、親子の再会に口を挟むような真似はしない。しかし警戒は怠らない。

しばらく泣いていたリーラを抱きしめていた男だったが、やがて彼女を体から離し、こちらへと歩を進めた。

彼の後をリーラが静々と続いていき、さらにその後ろを先ほどの男達が硬い表情で続く。

「初めまして。リーラの父のニグアルという。一応この村の村長をしております」

ニグアルがぞんざいな自己紹介をする。

村長ということだが、言われてみれば確かに厳格そうで、同時に穏やかな雰囲気を纏っており、平時ならさぞ頼もしいだろう。

だが先ほどの口論を目撃したカルシアとしてはどうも頼りなく思えて仕方が無い。それに先ほどから、まるで警戒するように大剣と刀へと視線をやってくる。

まあこんな時なので仕方無いことだろうが、気になる。

「俺はカルシア。こっちはミクリ。森で迷っていたところ、彼女と出会った」

リーラが襲われていたというのは言う必要もないことだ。リーラとしてもあまり触れられたくないだろう。

「そうでしたか……それは本当にありがとうございます。村がこんな状態でなければ、もてなしたいところですが、あいにくそんな余裕ありませんでな」

「リーラから聞いた。かなりの人が殺されたみたいだな」

「ええ。数えたところ168人にも及びました。それも討伐隊が全滅したものとした上で、分かっているだけ、ということですが。中には森に入っただけのまま殺されたり、連れて行かれたりしも者もおるの
で……」

居た堪れないといった様子で首を振る。

リーラから聞いていた人数よりも、かなり多くが犠牲になってい
るようだった。もしかしたざっと180は死んだのかもしれない。

「随分と多いらしいの」

ミクリが悲しげな声を出すとニグアルが驚いて小さな竜を見る。
どうやらリーラと同じく喋れるとは思っていなかったらしい。彼の
後ろに控えている村人も似たような反応を示した。

「この村には無礼な者が多いの」

彼らの反応を見て憮然とした声を出す。

「いや、申し訳ない。何しろ竜を初めて見たもので……」

まさか喋れるとは思わなかった。

そう言いたいらしい。実際のところ、この大きさの竜が喋れるの
は珍しいのだが。

「構わない」

ミクリに代わってカルシアが答える。抗議の目を向けてきたが、
気付かない振りをして先を続ける。

「それよりも盗賊達というのは今どこに？ 姿が見えないようだが」

「奴らなら住処に戻っていきましたよ。おかげで何とかこれだけ生
き残れた」

「……こんなに殺しておいて、引き揚げたと？」

「ええ、一体何がしたかったのやら……」

ニグアルの目が泳ぐ。嘘のつけない性格をしているようだ。

彼は何かを隠している。

そう確信した。

カルシアの思考など、うかがい知ることの出来ないニグアルは、
思わぬ提案をしてきた。

「ところでカルシアさんはこの後どうするおつもりかな？ ……も
う日が暮れて空が暗い。こんな時だが、是非お礼がしたいので一晚
泊まっていかれんだろうか」

「……この村で？」

死体が並べられ、血の臭気が漂うこの村で？

いつまた盗賊たちが戻ってくるか分からないこの村で？

もはや死んだように見えるこの村で？

問い詰めたいのをぐっと我慢して、簡潔に訊いた。

「もちろん無理にとは言いませんし、もはや村よりも森の方が安全かもしれません。それでもせめて、この子を助けてくれたお礼がしたい」

横に控えているリーラの頭に手を置き、優しく目を向けた。

感謝しているというその言葉は信じてもいいのかもしれない。だがどうにも油断ができない。

「……どうでしょうか？」

黙りこんだカルシアに、不安げに再度訊く。

「別に構わんじやろ。それにワシは布団で寝たい」

ミクリが余計な口を挟む。

……断ろうと思えば理由はいくらでも挙げられる。自分の身を守ろうと思うならここは断るべきだが……

「……そうだな。世話になることにしようか」

「そうですか。来られるか」

ほっとしたように息をつく。その後ろの男達もあからさまに安心したような表情を見せた。

早計だったとは思わない。彼らが何か企んでいたとしてもカルシアにとっては問題ないからだ。

「それではまだ早いですが、こちらの方へどうぞ」

片手を広場とは反対の方向へ広げる。ちょうど男達の真ん中を通ることになり、彼らがさっと左右に分かれ道を譲る。

ニグアルが先に歩きだしたので、その後ろに続いていく

男達の何ともいえない視線を受けながら、彼らの間を通る。

彼らの表情は様々だったが、その中でもあの若者が気になった。

悔しそうな目。

拳を握り、細かく震えている。

逃げろと言ったことといい、何が迫っているのか。

……どうでもいいことだ。彼らに自分を傷つけることなど出来ないのだから。

黙々と歩き、ニグアルが一軒の家の角を曲がり、彼らの視線が外れたところで、目の前の様子に意識が飛んだ。

カルシアは思わず眉根を寄せる。リーラも気分が悪くなったのか、ニグアルの横に並び、腕を抱くようにしてくっつく。

先ほどの道は村の正面から続く道で、綺麗にされていた。生き残った者たちで片付けていたのだろう。

だが目の前のこの場所は酷いありさまだった。

未だ片付けられていない死体が無造作に転がっている。

中には腕が半分ちぎれ、骨が見えているものもあり、見るものによつては悪心が募る。

未だ放置されている彼らに共通するものは、皆がありりと恐怖の表情を浮かべていることだ。

何故こんな目に遭うのか。

物言わぬ目が、そう問いかけているように見えてならない。

死んだ彼らの間を通り抜けていく。

視界の端で、血がべったりと壁についているのが見えた。

暗くてほとんど分からないが、血のついた手で触れ、そのままずるずると下につづいているようだ。

まだ完全に乾いていない血溜まりもあるが、死体は片付けられたのか、そこには無い。

さっきまでの道にも、同じような生々しい跡があったのかもしれないが、この暗さで気がつかなかった。

できれば気がつきたくなかったが。

嫌なものを見た。

ミクリの表情もどことなく暗い気がする。

ニグアルはもはや見慣れてしまったのか、後ろから見る限り動揺

を見せない。

表面に出さないだけかもしれない。

「あれかの？ ニグアルの家は」

ミクリが目を細める。

放置された死体の間を抜けて、さほど遠くないところに一際大きな木作りの家があった。

とは言うものの、他の家と比べてというだけで、とりわけ豪奢というようなものでもない。

近づくにつれ、段々と大きくなるその家は、村の端にポツンと忘れられたように、佇んでいた。

家のすぐ後ろに村を囲む柵があった。

「ここが私たちの家です。どうぞ」

玄関を開けて脇に立ち、カルシア達を促す。

カルシアとミクリはちらりと顔を見合わせ、家の中に入っていく。続いてリーラとニグアルが入ると、ボタンという玄関を閉める音が響いた。

06 カルシアの湯浴み

家の中はあまり家具はなく、盗賊が来たとは思えないほど綺麗にされていた。いや、本当にここには来なかったのかもしれない。

外の悲しみに暮れた人々とは無縁の空間だった。

家の真ん中には木造の机と、丸太を切ったような小さな椅子が置かれている。

他には二階へ続く階段がある他、玄関以外に扉が一つある。キッチンが別になっているようで、見た感じ、扉の無い狭そうな部屋が、キッチンになっているようだ。

そこから美味しそうな、いい匂いが漂ってくる。すでに食事の準備していたらしい。

……同時に全く別の臭い。よく知っている二つの臭い。

——一つは分かるが、もう一つは？

カルシアがいぶかしんでいる間に、ニグアルは真っ直ぐキッチンの方へと向かい、姿を隠してしまった。後ろにてととと、リーラが続いていく。

奥で小さな話し声が聞こえる。

「クオルさん、料理はできとるか？」

「お帰りなさいませ。もう少々、お待ち下さい」

「分かった」

お手伝いさんがいるようで、声からすると女性。彼女が準備を整えていたらしい。とはいえ、家に入る前から気配で分かっていたことではある。

「クオルさん、ただいま……」

「お帰りなさいませ、お嬢様。……よく、ご無事で……」

「私は助けてもらったから……でも、お母さん……死んじゃった……」

涙声になっている。姿は見えないが、泣いているのが分かる。

「……きつと奥様はお嬢様が生きていてくれて、ご満足でしょう」

その後も二人のやりとりは続いたが、ニグアルは戻ってきた。

「申し訳ないが、もう少しかかるらしい。客間に案内するので、そちらでお休みください」

「ああ。そうさせてもらう」

ニグアルの提案に頷くと、「それではこちらへ」と二階へ案内しようとしてくれたが、階段へ辿り着く前に、ここ数日彷徨っていたため、体が旅で汚れていることを思い出し、

「先に体を洗ってくる」

と再び外へ出ようと、玄関に向かう。

「川まで行かれるのか。湯浴みの準備ぐらいさせてもらうが」

「それには及ばない」

好意は有難いが、自分でやる方が断然に早い。ミクリを引き連れ、玄関を開く。

そのまま二人で行くつもりだったが、考え直して一度だけ振り向き、キッチンに声をかける。

「リーラも来い」

キッチンでの会話が止まる。目元を赤く晴らしたリーラが出てきた。

涙はすでにない。

「えっと……どこにですか？」

リーラが不思議そうな声をあげる。こちらの会話など、聞こえてなかったのだろう。

本人よりもむしろ、ニグアルの方が驚きの声をあげた。

「カルシアさん、リーラはまだ子供とはいえない——」

「安心しろ、俺もそこまで無神経じゃない。リーラおいで、体を洗ってやる。三分もあれば済む」

「えっと……」

事態を大体把握したリーラは困惑顔で、同じく困惑した様子のに

グアルとカルシアを見比べる。

いきなり男の人に洗ってやると言われて、喜ぶはずもない。

「不安ならニグアルさんもくればいい。どうせ家の裏までしか行かない」

「……そうですね。そうさせてもらいますか」

不承不承といった様子で答えた。

「おいで。家の裏までで構わないから」

「……それじゃあ」

父親が来るということで、複雑な顔をしたリーラだったが、結局恐る恐るだが頷いた。

カルシアは満足そうに一つ頷き、外へ出る。

「あの、本当にすぐ済むんですか？」

僅かに不安の色を滲ませながらリーラが訊いてくる。

リーラの顔を見ると不安そうな表情をしている。当たり前だろうが。

「川の見える場所に着いたらすぐ済む」

あつという間に裏に着く。

何しろ廻り込んだだけなのだから、早い。

すぐ目の前に古くなった、腰までの高さしかない柵と、もっと向こうには横に流れる川が見える。

ここに着くまでに三十秒程度しか掛かっていない。

柵を越え、十歩ほど進んだところで止まる。川はまだまだ遠い。

「あの、ここで何を？」

カルシアの顔を覗き込むが、結局分からなかったようで、ミクリへと視線を移す。

珍しくカルシアの肩に止まっていたこの竜は、表情に乏しいが、なんとなく笑っているようである。

まるで悪戯っ子のように。

柵の近くに居るニグアルも、急に立ち止まったことに対して、首

を傾げている。

カルシアはおもむろに片手を前に出した。

リーラは片手が突き出された先、つまり川の方を見る。

「え……？」

ミクリが喉の奥で笑うが、リーラは気付かないようで、目を細めて遠くの川を凝視していた。

そしてそれは、ニグアルもまた同じだった。

リーラとニグアルは不思議な光景を見ている。

川の一部分が、重力にも川の流れにも逆らって、盛り上がっている。

徐々に上へと上がっていき、ついには完全に浮きあがってしまい、水の球体が出来上がった。

遠くて大きさがいまいち分からないが、この三人をすっぽりと包むには十分の大きさだ。

浮き上がった球体は、こちらへと凄い勢いで近づき、目の前で急停止した。

水滴すら落とさない、完全な球体だった。

蒸気を発していて熱を持っている。

お湯になっていた。

「リーラ、息を止めろよ」

呆然と球体を見ていたリーラに声をかけてやる。

もし黙ったままやっていたら、間違いなく溺れていた。

カルシアの声でハッと気付いたリーラは、大きく息を吸い込み、止める。

もう大丈夫。

そう言わんばかりに頷いたのを見たカルシアは、片手でリーラをしっかりと引き寄せてから、球体をおろす。もちろん自分たちを完全に包むように。

次に突き出していた腕を横に振る。すると球体が回転を始めた。

リーラは目をしっかり瞑り、口から空気がでないよう、しっかりと押さえていた。

リーラの小麦色の髪と尻尾が、水流のために強く横に引っ張られている。

もしカルシアがリーラを抑えていなかったら、彼女の体は回転に飲まれていただろう。

ミクリは何度も経験していることで、しっかりとカルシアの肩を、小さな前足で握っている。

十秒ほどで再び腕を前に突き出し、球体は再び上昇した。

浮かんだ球体からはやはり水滴すら落ちない。

「ぷはあ……」

「苦しかったか？」

大きく息を吐き出したリーラに優しく訊く。

「……少しだけ」

「いきなりだったからな」

「でも気持ちよかったですよ」

目を輝かせて言ったリーラに対して、少しだけ微笑んでやる。

——目に怪しい光があったのが気にはなかったが。

「さて後は水の処理と、服を乾かさないと」

軽く手首を前に動かす。

浮かんでいた球体が勢いよく川に戻っていったが、半ばで落ち、バシャンと派手な音を立てる。

「川まで戻す必要もないだろ」

言い訳のようにポツリと呟いてから、リーラの体を正面から向かせて、手をかざす。

「うわあ……」

リーラが感嘆の声をあげるのも当然だった。

リーラの体が薄く黄色に輝いている。魔力に包まれているのだ。同時にカルシア自身と、ついでのようにミクリも輝く。

みるみる服が乾いていった。

「これで終わりだ。戻るか」

完全に乾いたのを確認してから告げる。

「は、はい」

不思議なものを見たような表情をして、先に歩き出していたカルシアを、リーラが追いかけた。

「いやはや、まさか魔術師だったとは……」

柵の前に立っていたニグアルが、驚嘆の声をあげた。

この一風変わった湯浴みに一番驚いたのは、彼だったかもしれな
い。

パフォーマンスはこれで十分だろう。

それでももしあれを使うようならば……覚悟してもらおう。

07 ニグアルの頼み

用意してもらった客間でカルシアとミクリは一息つく。

久しぶりに体を洗い、実にすっきりとした様子だ。体中埃まみれだったのが、髪にはつやが戻り、すっかり綺麗になっている。

呼ばれるまでの間、カルシアはミクリと喋りながら待っていた。

話しの内容は主に村長、というよりもこの村が受けた要求についてで、恐らくそのためにニグアルは悩んでいる。

何を悩んでいるのかは具体的には分からない。今もこっそりつけていたあの村人達と、外で話し合いをしている。

気がついていないとでも思っているのだろうか。

一つ確かことがある。

「もし敵意をもってきたら……」

殺すつもりだ。

最後まで言わなくてもミクリには伝わり、ゆっくりと頷いた。

全く持って物騒な会話を交わす二人である。

しばらくするとリーラが呼びに来た。枝でボロボロになった可愛い服から、動きやすい男装のような格好に変わっている。

襲撃された時、逃げやすい様にだろう。

よほど前の服は逃げにくかったらしい。

リーラに案内されていくと、テーブルの上にはすでに食事の準備が整っていて、主人であるニグアルが待っていた。

座るように促され、カルシアが腰掛けると、隣にミクリが机の上にちょこんと降り立つ。

目の前にニグアル、ミクリの前にリーラが座った。

最初にニグアルが口を開いた。

「改めて礼を言わせて貰う。カルシアさん、娘を助けていただき、本当にありがとう」

ニグアルとリーラが頭を下げる。

「ささやかですが、どうぞご賞味下さい」

そうして晚餐が始まった。

シチューを中心とした簡単な料理だったが、クオールの腕がいいように、かなりうまい。

何よりも用意された赤ワインが合っていて、食が進む。

ミクリも口に合ったようで、顔を汚しながら、ガツガツと口を突っ込んで食べている。

食事中は主にカルシアが喋っていた。仕方無しに。

村がこんな状態でニグアルやリーラに喋らせるのは、酷だろうか。

ミクリはとても喋れる状態じゃない。

「北のホイルドという民族は狼と暮らしていてな。食べるのも眠るのも一緒に生活していた」

他愛のない話だ。

カルシアは自分でポツポツとした喋りをすると思っており、非常に聞き取りにくいとも思っている。

だが目の前の二人、特にリーラはしきりに耳を傾け、興味深そうに聞いていた。

ニグアルも興味深そうなのだが、表情は多少暗い。

……食事が進むごとに表情が暗くなっている気がする。

食事が終わり、食器が下げられた頃には、リーラは現状など忘れたように、話しの続きを聞きたがっていた。

「……カルシアさん。頼みがあるのですが、聞いてもらっても良いかな？」

ニグアルが硬い表情で、話をせがむリーラを遮るように、決然とした口調で言った。

——来たな。

内心の思いなど顔には出さない。内容も想像がつく。

「マクル草もムロウスの種も使わなかったようだから、聞いても構わない」

とたんにニグアルの顔が強張った。

「どうしてそれを……」

「カルシアは鼻が効くからの」

クオルに顔を拭いてもらい、再び綺麗になったミクリが口を挟む。ニグアルが完全に固まる。

「あ、お父さんも竜が喋れるの、知らなかったんだ」

場の雰囲気気付かないリーラが楽しげに笑う。

「……リーラ。お前は部屋に行ってなさい」

「え？ 何で？」

「いいから行きなさい」

押し殺したような声。

今にも怒鳴ってしまいそうな。

ようやく雰囲気察したリーラは、渋々といったふうだったが、階段へと向かった。

完全に姿が見えなってから、ニグアルは再び口を開いた。

「ミクリ、さんでいいのかな？」

「構わん」

ミクリが頷く。

「ミクリさんが言うには、あなたは鼻がいいらしいが……」

「ああ。いい匂いに乗ってマクル草で作った睡眠薬と、ムロウスの種を磨り潰した嫌な臭いがまざっていたな……毒の臭いだ」

ニグアルは大きく嘆息する。

マクル草を茹でたあとの水は睡眠薬になる。比較的どこにでも生えている草で手に入れるのは容易だ。

うまく作ればスプーン一杯で大人なら眠りこけてしまい、丸一日目が覚めない。

ムロウスの種も同じく手に入りやすい。ムロウス自体は傷に塗ると薬草として効果を発揮する。

だが種は毒素が強く、扱いに注意する必要がある。

小さな種だが、口に含んだだけでも人が死ぬ。

どちらも僅かに独特の臭いがあるものの、すぐ傍まで鼻を寄せないと匂わないほど、極々微かな臭いだ。

にも関わらず、カルシアはしっかりとその臭いを嗅ぎ取っていた。扉がついていないとはいえ、一つ離れた部屋から。

「とても信じられない……」

ポツリと零す。

「信じようが信じまいがどちらでも好きにしたらいい。問題はそんなことでは無いだろう？」

「まあ……確かに」

ニグアルが苦笑いをするが、すぐに気まずそうな顔へと変わる。

「ん？ ああ、実行しなかったんだから気にしなくていい」

結局入れなかったとはいえ、用意していたという事実がばれたということで、彼を落ち着かなくさせているのだろう。

「……そう言って貰えるなら、有難い」

「入れられたとしても、ワシらに毒は効かんしの」

「そういうことだ。代わりにあんたを殺してただけだな」

ニグアルが小さな笑い声を上げる。

——冗談だと思ったのだろうか？

カルシアは本気だった。悪意を持って害しようとするものに、容赦するつもりはない。リーラの父親だろうとだ。

そんなカルシアの胸中など知らず、笑いを治めて話を戻した。

「頼みというのは、盗賊たちのことなのです」

「退治、ということか？」

「察しが早い。そうです。あなたの魔術師としての腕を見込んで、是非お願いしたい」

すぐに返事をせず無言でいると、ニグアルが話を続けた。

「……あいつらには、苦しめられ続けてきた。他所からやってきて、突然住み着いたと思ったら無茶な要求ばかり……しかもどんどんと

エスカレートしてくる。しかし逆らえば殺される。我慢してきたんだ……だがあいつらはとうとう、村の仲間を殺しやがった！もう限界だ！ 殺らなければ、こちらが殺られる！ そう思って出した討伐隊だったのに……全員、無為に殺されてしまった……私の息子まで一緒に……私は、被害を大きくしてしまっただけだ……この村で出せるものは何でも出す。だから……頼む……」

段々と感情が高まり、最後には微かに涙声になっている。

彼は両手を組み、肘を突いていつの間にか祈るような格好をしていた。

黙って聞いていたカルシアだったが、やがて、口を開く。

「……何故、あれを用意した？ 奴らの要求とやらのためか？」

マクル草とムロウスの種のことだ。

具体的に言わずとも、ニグアルに正しく伝わる。

「……そうだ」

「俺は要求とやらを知らないが、何を要求されたんだ？」

「……君たちだよ」

「俺たち？ 俺とミクリか？」

ミクリがピクリと首をもたげる。

「正確には君とリーラだよ」

「リーラか……なるほどな。獣人は高く売れる」

「そういう事だ。……要求されてからずっと悩んでいた」

「ふん。悩んでいようと、結局渡せば意味はないだろ」

どれだけ悩んでいようと、どれだけ苦しんでいようと、最終的に

盗賊に従って娘を渡せば、盗賊に与したことと同義だ。

そこにはどんな大儀も存在しない。

カルシアはそう思っている。

だがニグアルは違う考えのようで、嫌そうな顔をしている。お互いに口にはしなかったが。

「リーラが狙われた理由は分かった。むしろ今まで狙われなかったのが、幸運だったな。それで、どうして俺が狙われる？」

「……リーラを助けたのが原因だな」

ますます嫌そうな、というよりも苦々しい表情浮かべて、説明を続けてくれた。

「あいつらが、私たちを狩りの的にして遊んでいる時に、奴らの仲間の一人が来てな」

狩りの的、と聞いてさすがに顔を顰める。

襲われたと思われる時間から、結構な時間が経った割には、被害が少ない気がしたが、これが原因だったのか。

リーラを助けた時の距離や時間を考えたら、村人が全滅していて普通だった。

「戻ってきた男は仲間二人が、教会の人間に殺されたと言ってたよ」
逃したあの油顔の男だろう。

ニグアルはまるでリーラを奴らから助けたことを、知っているような口ぶりだったが、これで納得がいった。

「その報告をムオラ、奴らのボスだが、そいつが私たちに要求してきたのだ。リーラを渡すことと、あんたを渡すことを。どちらかでも拒否すれば、私たちを皆殺しにすると笑って言いやがった。遊んでやがるんだ……」

ムオラ……聞き覚えがある。

どこで聞いたのだったか思い出そうとしたとき、玄関をノックする音が響いた。

08 ニグアルの苦悩

「どうぞ」

訪問者が誰か分かっているようで、ニグアルはすぐさま促す。

玄関を開けて入ってきたのは、カルシアに逃げろと伝えた、あの若い男だった。

彼はカルシアに軽く頭を下げたあと、ニグアルの傍まで寄っていった。

「準備は出来ました。いつでも大丈夫です」

「分かった」

男は今度はニグアルに頭を下げ、そのまま出て行こうとする。

「待て。お前達だけで攻めるつもりか？」

出て行こうとするのを呼び止め、尋ねる。

男はゆっくりと振り向いた。

「あんたが優秀な魔法使いだというのは知っている。だからといってあんただけに戦わせるつもりもない。そんな卑怯なこととはしたくない。もし、あんたが断ったとしても、俺たちだけでやるつもりだ」
言うだけ言うと、顔を背け、彼は出て行った。今度はカルシアも呼び止めなかった。

「盗賊とかいうのはお主たちだけで、勝てるような相手なのか？」

ミクリが小首を傾げて訊く。

「いや、おそろく無駄だろう。それでも私たちはやらなければならない」

「まるで自殺じゃな」

ミクリの口舌には容赦がない。

だがニグアルは苦々しく笑うだけだった。

「……どれぐらいの人が集まったんだ？」

「女子供以外全員。私も行くつもりだ。全部で15人だな」

突然、どたどた慌しい足音が階段から聞こえた。

リーラが酷い形相で降りてきたのだ。

驚いているニグアルに彼女が詰め寄る。

「お父さん、何考えてるの？ そんなの死んじゃうだけだよ。やめてよ！」

「リーラお前、聞こえていたのか」

「……獣人の聴力を見くびっていたみたいだな」

カルシアはポツリと言う。

彼にしたら気配で丸分かりだったので、驚くことでもない。

カルシアの言葉など、二人には聞こえなかったようで、リーラはニグアルに未だ詰め寄っていた。

「お父さんが行く事無い！ 私が、私が行けば皆助かるんでしょ？ 私が行く！ だから、お父さん達はやめて、危ないことしないで」
リーラは必死に止めようとするが、ニグアルは首を横に振った。
少しだけ寂しそうな、穏やかな表情で。

「駄目だ。それは出来ない。私たちはもう、お前を渡すつもりなんて無いんだよ」

「でもこのままじゃ……」

全員死ぬ。

今残っているのは討伐隊にも選ばれなかった、戦えない者たちだ。彼らが行ったところで、意味の無いことは明白だった。

全て分かっている。

全て分かっている、彼らは行かずにはいられないのだろう。

平和を乱し、仲間を殺した盗賊に一矢報いたい。

その気持ちカルシアにも伝わった。

「依頼を受けよう」

二人が行く、行かせないと口論をしていた中、突然口を開いた。
口論をやめ、二人共こちらをビックリしたような目で見る。

「受けて頂けるか」

ほっとしたような声。

「だが、私が依頼しておいてなんだが、危なくなったらあなただけ

でも、すぐに逃げて貰えないだろうか。恩人を傷つけたくは無いです」

「……分かった」

たかが盗賊相手に危なくなることなど無いが、それを説明するのは難しいし、面倒臭い。

なので、ただ頷くだけにした。

「カルシアさん……なんでそんな無茶なこと……」

「そうと決まればすぐにでも行こう。あと、報酬はいらない。教会の仕事としての範疇だ」

リーラを見ずに、立ち上がりながら答える。

ミクリも飛び上がり、玄関へと向かったカルシアに続く。

さらにその後ろをニグアルが続き、カルシアに尋ねた。

「カルシアさん、教会の仕事というのは？」

「こちらのことだ。それよりも、奴らの場所まで案内してほしい」
振り向かずにそっけなく言う。

「案内ぐらいはやらせてもらう。私たちも戦うからな」

「案内役が一人でもいい。それ以上は邪魔だ」

「邪魔……」

不快そうな顔をするニグアルである。

命を懸けて戦おうとする彼らには、辛い言い方かもしれない。

だがそれだけの人数がついてきたら、確実に死者が出る

それは出来れば避けたい。彼らにもう死者はいらない。

「……リーラは何のようだ？」

とりあえず広場に向かうため、黙々と歩いていたが、来る時に見た放置されている死体を通り過ぎたあたりで、振り返り訊いた。

——嫌な臭いがする。

彼女はニグアルのかなり後ろを俯き加減で歩いていた。耳と尻尾はうなだれて、元気が無い。

この感情がコロコロ変わる少女は、今どんな思いでいるのだろうか。

声をかけてやると、ニグアルの横まで寄ってきた。

「お父さん達が行くなら、私も行く……」

「リーラ！ 駄目だと言ったろう」

「だって、家で待ってたって同じじゃない！ 皆殺されて、あいつらがまた来て！ それなら私だって一緒にいたい！」

ニグアルはぐっと詰まる。

こちらから攻撃するのだ、必ずまた報復がある。しかも今度は男全員で行くことになるのだろう。

残された者たちを守ることが出来ない。

「……他の皆には森に逃げるよう言っている。運がよければ逃げられる」

「逃げ切れないかもしれない。私も一緒がいい」

決然と宣言する。

突然、笑い声が響いた。

「何とも勇ましい娘っ子じゃな。どうせ誰も死には無いんじゃ、誰を連れて行ってもよからう？」

ミクリはカルシアの気も知れず、暢気な提案をした。

できるだけ、連れて行かない方向で考えていたというのに。

「……とりあえず広場についてからの話しだな」

再び一行が歩き出し、荒れた村の中を通っていく。

広場の前に人だかりができてるのが見えた。

攻める人数は15人と聞いていたが、どうみてもそれより多い。

もしかしたら、生き残った全員が集まっているのかもしれない。

あの若い彼以外の男といえば、老人かまだ少年のような子供ばかりで、とても戦闘に耐えられるようには見えない。

若く力のありそうなのは、せいぜい二、三人だ。

近づいていくと、あの若い男が困り顔で一步前に進み出た。

彼が代表らしい。

「村長、ちょっと問題が……」

ニグアルが訝しそうに、男を見つめる。

「問題だと？」

「ええ。皆が逃げてくれないのです」

「何？」

「俺たちを死なせて、自分達だけが生き残るわけにはいかない、と彼の後ろで主に女達がこくこくと頷いている。

「あたしたちだって戦えるんだ。どうせならあたしたちにも戦わせてくれよ」

一人の太ったおばさんがそう言うと、他の人たちもそうだそうだと声をあげた。

頭の痛い問題である。

「駄目だ」

拒否の声をあげたのはカルシア。大きな声でも無かったが、よく通る声は全員に聞こえ、ピタッとざわつきが止む。

ニグアルが頷き、後を続けるように話した。

「その通りだ。君たちは逃げなさい。私たちだけで十分。なあに、勝算はある。心配しなくていい」

虚勢。

誰もが察し、再び場は騒然とした。

それをニグアルが必死に抑えようとしている。

「静まれ！」

再びカルシア。だが今度ははっきりと大きな声をあげ、驚いた全員が口を閉ざし、彼に注目した。

「誤解があるようなので言うておく。この中で俺について来ていいのは一人だけだ。それ以上はむしろ邪魔になる。案内役の一人だけ、それ以外は待っていてもらいたい」

この発言に一番驚いたのはニグアルだ。

「カルシアさん、一体どういうことですか？」

「どうもこうも無い。余計な死傷者を出したくないなら、言う通りにしてもらおう」

「待てよ」

冷徹な宣告にあの若い男が声を荒げる。

「あんたが優秀な魔術師ってのは知ってる。遠くから俺も見えたかな。だけどあんただけで勝てるとは思えん」

「ふん」

面白いことを言う。

鼻で笑われた男は、不快そうな顔をしつつ続ける。

「あいつは化け物みたいな力をしてるんだ。魔法だけで勝てるかどうか」

「……時間が惜しい。ニグアル、あんたがついてきてくれ」

「構わんが」

ちらりと男を窺いながら言う。

彼も本心では男に同意しているようだ。

カルシアはもはや構わず、とりあえず村を出ようと歩き出した

男は追いつがり、カルシアの肩を掴み、むりやり止めようとした。

「待てって！」

「いい加減にしろ」

軽く掌を男の腹に当てる。

すると男の体かくの字に折れ曲がり、吹き飛んだ。

地面を二転三転し、ようやく止まる。

男は意識を失ってはいなかったが、苦しそうなうめき声をあげ、立ち上がれないでいる。

他の者は彼を助けようとしめない。

いや、カルシアの力の一旦に触れて、動けないでいた。

「これ以上時間を取らせるな」

再び歩き出そうとしたが、一歩も行かずに止まる。

「リーラ……お前もか？」

リーラが強張った表情で目の前を塞いだのだ。

イライラし始めていたカルシアは、キッと彼女を睨む。

「……私に案内させてもらえませんか？」

「何を言っている。お前はここにいなさい」

ニグアルが多少声を荒げる。

「駄目ですか？」

しばらく目の前の少女を睨んでいたカルシアだったが、ふっと目の力を弱める。

「いいだろう。ニグアルの代わりに案内してもらおうか」とたんにリーラの表情が緩み、小さな笑みを浮かべた。

「何を考えているんだ！」

同時に怒声も飛ぶ。ニグアルだ。

「娘をなぜわざわざ危険なところへやろうとする！」

「彼女があんたより覚悟を持っているからだ」

「なに？」

カルシアは説明をせず、代わりに笑みを浮かべる。

久しぶりに浮かべた、自然な笑みだ。

「それだけの覚悟を持つ奴は好きだ」

——意味があるとは思えないが。

それは口にせず、頭二つ分ほど小さい、彼女の頭を撫でながら褒める。

納得いかないのはニグアルである。

「リーラを案内になんていかせられん！ 絶対に駄目だ！」

憤慨しているニグアルを軽く睨む。

突然だった。

カルシアがニグアルの首筋に、手刀を打ち込んだ。

集まっていた村人たちには、残像にしか見えない速度で。

手刀を打たれた彼は気を失い、倒れそうになったのをカルシアが抱きとめた。

そしてゆっくりと地面に寝かせる。

「お、お父さん……」

「寝かせただけだ。時間がかかりそうだったからな」
悪びれた様子もない。

リーラも頷いただけで、批判はしなかった。
説得できるとは彼女にも思えなかったから。
呆然とする村人達を置いて、彼らは歩み始めた。

09 審判

呆然とした村人達を置いて、村を出たミクリを含めた三人は、リーラの案内で廃墟とやらに向かっていた。

リーラによると、森を回りこむように行くと着くらしく、すっかり静かになった森を右手にして歩んでいた。

「リーラ。一応訊いておくが、どうするつもりだったんだ？」

「どうって……？」

声を震わせながら聞き返す。

だらんとぶら下がっている尻尾と、手も微かに震えている。

「ムロウスの種、それにマクル草も持ってきてるな。それでどうするつもりだったんだ？」

ピタッと歩みを止める。

喋ることを戸惑うように視線を泳がせたが、やがて諦めたのか、ボソボソと話し始めた。

「……もしカルシアさんが殺された時には、私自身を人質にしようと思ってました。私は高く売れるそうですから」

寂しげに笑う。

——やはりこの子は皆を救おうとしたのか。自分だけが犠牲になつて。

思わずため息が出る。

「残念だが、意味はあまりないな」

「え？」

「獣人は死んでも価値はほとんど変わらない。多少落ちるがな」

「他にも理由が多いの。言う事を聞いた振りをして、隙を見て種を取られ、それで終わりじゃな。大体、今から攻めに行くんじゃ。要求とはかけ離れとるし、奴らがそれを許すとも思えんしの」

ミクリが後を引き継ぎ、とうとうと事実を述べていく。

「そうですか……駄目ですね、私……せめて皆を守りたかったのに」

「俺は立派だと思う。自分を犠牲にして他人を助けようというのは、意外と難しいんだ」

——ニグアルも表面的にはともかく、内心では他人のことを考えていなかった。

最初はカルシア達を突き出そうと毒と睡眠薬を用意し、カルシアの実力が分かると攻めようとした。

俺の実力が分かるとすぐ攻める？ はっきり言って理解できない。攻撃の準備が終わったあの時、まだ引き受けるとも言っていないかった。

——私たちは玉碎覚悟だ。可哀想だろう？ 力になってくるよな？ まるでそう言われた気がした。

本当に村人の事を考えていたのなら、今夜中に逃げれば良かったのだ。森の中に猛獣は居ないのだから。

足止めのために何人かが村に留まり、盗賊が来るのを待てば十分な時間が稼げ、多くが助かったはずだ。

盗賊は30人程度、とても森の中を探しには回れない。

彼は狡猾だったと言える。

わざわざムオラの名前を出したのも、引き受けざるを得ない状況を作るため、だったかもしれない。

それを考えると、リーラはやはり立派なのだと思う。

考えの足りない点が多い。

だが皆を助けたいという気持ちだけは伝わる。

——おしいかな、知識と実力が足りない。

カルシアはそう思うのだ。

だがリーラは恥ずかしそうに俯いているだけだった。

そろそろ行こうかと先を促すと、リーラが再び歩き始めた。

「……ところで、なんでマクル草を持ってきたんだ？ 睡眠薬になるのは茹でた後の水だろ？」

「え？ そうだったんですか？ 私、知らなくて……台所にあったそれらしいのを、持ってきたんですけど」

「なるほどな……リーラは少し勉強もした方がいいな。種の方は口に含むだけで死ぬから、気をつけろよ」

リーラがビックリして振り向き、それ見てミクリが声をあげて笑っていた。

だがカルシアはふと引かかるものを感じた。

それは極々小さな、違和感でしかなかったが……。

二十分ほど歩くと、森を背にした廃墟が見えてきた。とはいえ、壁が崩れたり、窓が割れたりという様子はなく、住もうと思えば問題の無さそうな、大きな屋敷だ。

松明が掲げられ、見張りすらもよく見えた。

気付くのはこちらの方が早かったが、そのうちに向こうも気付き、仲間を起こしに屋敷の中へと戻っていった。

カルシア達が屋敷に着いた時には、すでに盗賊団のおそらく全員が待ち構えていた。

彼らとある程度の距離をもって、立ち止まる。

緊張した沈黙が束の間続く。

——きつい死臭がする。

顔を顰めているとやがて、盗賊団の中から一人、前に歩み出た。

あの時の油顔の男だ。

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている。

「まさかてめえらから、出向いてくれるとは思ってなかったぜ」

リーラがカルシアの背後に隠れるように移動する。

実に嫌そうな表情を浮かべながら。

「よくもマイトとサミアラを殺りやがったな。たっぷり礼をしてやる」

口上を聞き終えたとき、思わずため息を長々と吐いてしまう。

多ければ勝てるでも思っているのだろうか。

「……実に見事な小悪党っぷりだな。残念だが俺たちはそんなくならないことを、言いに来たわけじゃない。ムオラというのはお前だ

な？」

油顔の男は顔を真っ赤にして、何か言おうと口を動かしたが、一人の逞しい男に下がるよう言われ、大人しく従った。渋々だったが、代わりに前に出た男は傍目からでも、筋肉が隆起しているのがはっきりと分かる。

腰には通常よりも大きな剣を差し、不敵な笑みを浮かべている。傭兵上がり。

まさにそんな感じの男だった。

「確かに俺がムオラだ。てめえは教会の死神らしいな」

ミクリに視線をやりながら確認してくる。

竜を連れているものなど、今の時代死神ぐらいしかありえない。

その小さな竜は目を細め、ムオラの顔をじっと見ている。

「間違いなく、其奴がムオラじゃ」

ミクリが喋ったことで、盗賊団の連中がざわざわと騒ぐ。

「つるせえ！　ちっと黙ってろ！」

ムオラの怒声により、一瞬にして静まり返った。

「喋れるたあ、珍しい竜だ。実に高く売れそうだな」

すでに勝ったと思っているのか、売った時の想像をしているようで、舌なめずりしている。

ミクリが喋るのを聞いた盗賊達は、大抵同じ反応をするのである。

「ところで村の連中はどうしたあ？　俺は確か、連れて来いっつたんだがな。自発的に来させろとは言わなかったなあ。これはあれだな？」

「要求拒否と同じだな？」

くだらない難癖だ。

すぐにでも斬りたいが、まだ少し早い。

全員を斬るには、少し足りない。

このままだと、クオルしか斬れない。

どうするかと考えている間も、屋敷から流れる死臭が鼻について、落ち着かなかった。

……いや、この臭い。

あいつらが元々強い死臭を纏っていたので、気がつかなかった。
ミクリに森の中へ行かせようと口を開けたが、先にリーラの声が
飛んだ。

「あなたたちが皆を殺したの？」

水を打ったような静寂。

次の瞬間、盗賊達の間でどっと大きな笑い声が沸き起こった。

リーラがビクツとして再び隠れる。

笑っている者の中には腹を抱えているものもいるが、目に涙を浮かべているものさえいる。

おかしくて仕方無いといった様子だ。

「お前、馬鹿かぁ？ 全く別の誰かが殺したとでも思ってるのか？
当然俺たちが殺したに決まってるだろうが。くくっ……」

堪えられないというふうに語尾が笑いに染まっている。

リーラは顔を真っ赤にしていた。むろん、恥ずかしいのではなく、
怒りで。

盗賊達に一切悪びれた様子は、見当たらなかった。

「……つまり、お前達全員であの悪行をした、という事でいいんだ
な？」

「ああ、ああ、そうだ。俺たちがやったなあ。楽しかったぜ、人間
狩りはよ。赤ん坊抱えて逃げ回る奴もいたな。そういう時は赤ん坊
から殺してやるんだ。母親の目の前でな。ありゃ傑作だぜ。わんわ
ん泣いてよ」

ムオラは涙を拭きながら可笑しそうに言った。

「最低じゃのう、お主ら……」

普段表情の見えないミクリが、はっきりと怒りを顔に浮かべてい
る。

カルシアも胸の辺りがむかむかしていたが、別の事も冷静に考え
ていた。

——結果的に森に行ってもらう必要は無くなったな。

「カルシア」

「分かっている」

ミクリに言われ一步前に出ると、ムオラは後ろに下がり、他の盗賊たちが壁を作るように移動した。

気の早い何人かはすでに剣を抜いている。

一步、一步とゆっくり進んだカルシアだったが、突然体がぶれた。目の錯覚。

この場に居た全員がそう思った。直後には何の変哲も無かったからだ。

しかし大きく変わった点が二つ。

カルシアはいつの間にか後ろを向き、右手に剣が握られている。柄を持っているわけではなく、刃の部分を。五本の指先で。

さらに言えばカルシアの武器は抜かれていない。

「あれ？ 俺の剣……」

呆然とした声。

壁を作り、剣を抜いた一人だったのだが、彼の手の中から剣が消えていた。

カルシアがまさしく目にも留まらない速度で、剣をもぎ取ったのだ。

正確に状況を把握できた者が、この場にどれほどいたのだろうか。人間業とは思えない力。

見せ付けられたところで、到底信じられるものではなかった。

「ミクリ」

剣を持ち直し、真っ直ぐ上に立てると、ミクリが刀身に触れた。わずか数秒ほど。

背を向けたカルシアを斬るには、絶好の機会だったにも関わらず、誰も動けないで居た。

カルシアの発する覇気。

これが盗賊たちの動きを鈍らせていた。

「もうよい。この男、村の人間を三人殺しておるな」

それを聞くと、カルシアは再び盗賊達に向き直った。

「証拠、証言、自白の全てが揃った。これより審判を降す」

声を張り上げるでもなく、宣言する。

「審判だあ？ ふざけてんのか？」

ムオラが抗議の声をあげるか、聞こえていないかのように続ける。

「ニグアル、リーラの証言。盗賊団が村人を虐殺。盗賊団はこれを認めた。またメモリードラゴンの能力により、盗賊の一人が三人を殺傷したことを確認。全員が同程度の殺傷を行ったものと断定する。またムオラにはキリエルラ教会より手配されている、騎士殺しの重罪犯と断定。全員に審判を下す。ジャッジによる、断罪とする！」

カルシアは高らかに宣言した。

10 死神カルシア

「……お前、何言ってやがんだ？」

ムオラが呆れた声を出す。

彼の周囲では失笑すら洩れていた。

それほどカルシアの言は意味の分からないもので、宣言する必要があるか分らない。

リーラすら怪訝な表情を浮かべていた。

だが一方のカルシアはまじめな表情で、背中に負った大剣を止めるための、ベルトのようなものを外し始めている。

慣れた手つきで、あっという間に鞘ごと外してしまった。

今まではマントで隠れて、全容が見えなかった大剣が、初めて姿を現した。

「おいおい、なんちゅう大きさだよ……」

ムオラが呆れるのも無理はなく、この剣はカルシアとほぼ等身大の大きさを持つ。

銀に光る重々しい鞘を外すと、その場に落とす。

ずんという鞘とは思えない、重量感のある音を発した。

そしてカルシアの右手には、鞘から引き抜かれた長大な剣が雄々しく輝いていた。

輝いていた、という形容は正しい。

大剣はまるで夕日のように、穏やかな赤い色を発し、見るものを惹き込ませた。

時々、カルシアの緋色の目に呼応するかのように、刀身の輝きが波打つ。

「これは死神専用武器、ジャッジ。姿かたちは様々だが、特性は変わらない」

「特性だあ？」

「斬ったものの魂を地獄に送り、最後は消滅させる」

ムオラは醜惡な眉を顰める。

魂、と言われて真剣に受け取れるわけが無い。笑い飛ばしてもいいぐらいだ。

だがとても笑い飛ばせない。

話しがどうこうでなく、長大な大剣を片手で軽々と扱うカルシアの臂力が、盜賊たちを黙らせていたのだ。

「覚悟はいいな」

おもむろに一歩踏み出す。

「相手はたかが一人だ！ てめえら、囲んで殺せ！」

ムオラの命令を皮切りに、一斉に動き出した。

勇氣ある一人が正面から切りかかる。

蛮勇でしかない。

男が剣を振り上げた時、片手で大剣を軽く横なぎに振る。

ごうっと風を巻き起こしながらの、一閃。

胴の真ん中から男は二つに分かれた。

斬られた時の勢いで、死体は転がって行っただが、視線で追う暇もなくすぐさま次が来る。

三人、正面から同時。

——怯まないな。

微かな驚きだった。大抵はあれで怯む。

考えたのも束の間、三本の剣が迫る。

大剣を横にして一人の剣を捌き、一つの突きを同時に剣複で受け止める。

その二つの動作を同時に行うと、最後の一人の剣を上弾き、袈裟切りに斬る。

続いて横なぎに二人同時。

三人全員が二つ以上の体に分かれていた。

威力は大剣以上、素早さは素手並みに。

カルシアの剣は赤い残像ばかりを残した。

瞬時に四人殺され、ようやくここで盜賊たちに同様が走る。

ただしムオラだけは冷静だった。少なくとも表面上は。

不敵な笑みこそ消えていたものの、仲間になにか指示を出していた。

「次！」

指示を出している間に、斬りかかってきた二人を逆に斬り殺す。

目に見えて盗賊たちの戦意は鈍り始めていた。

「仕方ねえな。お前ら、しっかり補佐しろよ」

そう言うが早いのか、ムオラ自身が斬りかかってくる。

思っていたより早く来ただけに、意外の感が否めなかったが、それだけに困った。

今ここでムオラを殺すと、仲間達が逃げ散り、明らかに手間だ。というより面倒臭い。

どうせなら順々に他の盗賊を斬った後に、殺りたいところだった。上、上、横、逆袈裟懸け、突き。

カルシアの考えなど知らず、どんどんとムオラは攻撃を続ける。

左右から攻めてくる部下との連携がまた絶妙で、うまく攻撃の隙を作らせない。

右を止めたと思ったら左から。

上を止めたと思ったら下から斬りかかってくる。

二箇所同時というのも、狙ったように頻繁だった。

時には大剣を横にし、時には打ち払いそれらをかわす。

ムオラの表情を見ると、わずかな焦りがある。

カルシアがギリギリで防御している、のではなく、余裕を持って防御しているのが、分かったためだ。

余裕。

確かにカルシアにはあった。

傲慢にすら思える、絶対的な力量差を最初の一太刀で見破ったからだ。

だからこそ彼に珍しく、緩慢になった集中力。

ゆえに、彼は気付かなかった。

「きゃあ！」

リーラの悲鳴が聞こえるまで。

ハッとして後ろを振り向く。

リーラがまたあの油顔の男に捕まっていた。

後ろから腕で軽く首を取られ、もう片方の手で首筋に剣を当てられていた。

油顔男は嫌らしい笑みを浮かべている。

ミクリはいつの間にかやら、手の届かないような上空に飛んでおり、難を逃れている。

「これで形勢逆転、だな」

ムオラがにやりと、再び不敵な笑みを浮かべた。

「ふむ……卑怯だな」

「何とでも言え」

リーラは震えていないが不安そうな顔をしている。

——捕まってごめんなさい。

とでも思っていそうだった。

「さて、まずはその物騒な大剣を捨ててもらおうか」

ムオラが命令する。

大人しく言われたとおり、大剣を地面にゆっくりと置く。

「……次は腰の刀だ」

それも言われた通りに。

「くくっ、さすがの剣士様も——おい、何の真似だ？」

カルシアが両手を挙げたとたんに殺気立つ。

「いや、なに。久しぶりに剣を外したんでな。ちょっと伸びをしたくなっただけだ」

余裕綽々である。

「てめえ、何ふざけてやがる！ 状況分かってんのか！」

「状況？ 何か問題でもあるか？」

ムオラが凄むが、一向に意に介さない。

馬鹿にされていると思ったムオラの顔が、たちまちに赤くなり、

笑みも消えた。

「――お前はもう死ね！」

激怒したムオラは剣を大きく横に振る。

リーラが目を背ける暇もない。

惨劇。

一瞬後には首が転がる。

ゆっくり膝を突き、倒れる。

そんな光景が全員の脳裏に過ぎった。

だが実際には――

キン

高く綺麗な澄み切った音。

金属音とはまた違う。

まるで硝子と硝子をぶつけたような。

「お前、一体何なんだ……」

ムオラの剣はカルシアの首の皮一枚、切れなかったのだ。

剣が突きたてられた首の周りには、薄く虹色の残光があり、瞬く間に消えた。

答える代わりに、片手をおもむろにあげた。

油顔男に向けて。

「ぐあ！」

油顔男が吹き飛び、地面を転がる。

自分の剣で体を傷つけたのか、ところどころに切り傷が出来ている。

起き上がらないところを見ると、気を失ったようだ。

「魔法……？ 魔術師か！」

ムオラが後ずさる。

人質は取り返された。剣は効かない。逃げても魔法が飛んでくる。盗賊たちはどうすればいいか、分からなくなっていた。

彼らを横目にカルシアは悠々と、大剣を手取る。刀は取らなかった。

「さてと」

軽く盗賊たちを見た。

決して、睨んではない。

だが威に打たれた盗賊たちは――逃げた。

予測していたかのように動き、三人同時に斬る。

返す動作でさらに二人。

大剣の大きさを利用し、どんどんとまとめて斬っていく。

「やはり面倒になったな」

ボソリと愚痴る。

最後の数人はバラバラに逃げてしまったため、急いでその後ろを追う。

まずは比較的近かった一人を後ろから横なぎに。

続いて森に逃げようとしていた奴を追う。

振り向いた彼にはカルシアが巨大化したように見えただろう。

焦点の合う速度が間に合っていないのだ。

次の瞬間、驚きの表情を浮かべたまま、彼の首が落ちる。

森に入ろうとしていた、近くのもう数人。

一人斬り、もう一人を斬る。

その際に、嫌なものが目に入り、近づく。

すでに森に逃げようとした盗賊たちは、全員片付けたからだ。

それでも急がないといけないことに変わり無く、動き自体は素

早い。

すぐに見えた。

木々の生い茂る森の中に、討伐隊の死体の山。

ずっと臭っていた死臭の正体。

それがこれだった。

「ここに捨てたのか」

ボソツと言うと、すぐさま身を翻す。

感慨にふけっている暇は無いのだ。

リーラたちの場所まで戻る。

ムオラはさっきと変わらない様子で佇んでいた。

ただ顔色は悪い。

二十秒ほどは経っているはず。

何故何もしなかったのだろうか。

……どうしようもなかったのかもしれない。

下手に腕が立つから、察したのだろうか——自分の死を。

彼の横を通り、屋敷の横へ向かう。

死角になったその場所に、首を伸ばすと——一人隠れていた。

見つけると、ちょっとした木陰になっていた、その場所から出てきた。

顔を恐怖に歪め、剣を前に構える。

面白いように左右に大きく揺れている。

「た、たすけて……」

震えた声。

だがカルシアの足を止めることは出来なかった。

ゆっくり近づき、大剣を振り上げ、

「や、やめ——」

振り下ろす。

男は綺麗に左右に分かれ、それぞれの方向に倒れていった。

一瞥するとムオラを斬るべく、歩を進める。

戻るとやはり、ムオラが呆然と突っ立っていた。

「残ったのはお前だけだ」

「……すっかり忘れていた」

カルシアを目の前にし、別の話しを始めた。

「滅んだ、と聞いていたなあ……」

「何の話しだ」

「とぼけても無駄さあ。すっかり思い出した。お前、竜人だろ？」

力は人を遙かに越え、魔力に満ち、並みの膂力では傷すらつかない……ただの伝説だと思ってたんだがなあ……」

可笑しそうに喉の奥で笑う。

もはや観念したかのような笑いだった。

「俺はただの死神カルシアだ。騎士殺しのムオラ。覚悟はいいな」

「無駄だと分かってはいるが……抵抗はさせてもらうさ」
どこか吹っ切れたように言う。

「……人を越えた奴に殺されるなら悪くはない」

ムオラが先制。

突然にカルシアに向かって突っ込む。

勢いのまま、横なぎに。

剣を立ててそれを弾く。

が、ものともせず縦、横と剣を振るう。

一撃一撃が人間にしてはかなり重い。

相当の使い手のはず。

並の人間なら、すでに殺されている。

あいにく彼の相手は人間ではなかったが。

カルシアはそれらの攻撃を、余裕を持って弾く。

大剣を器用に細かく操っている。

膂力の差。

それがムオラに決定的な隙を作らせてしまった。

上からの一閃。

剣を立てて受け、器用に受け流す。

地面ギリギリまで下がったムオラの剣を、上から素早く斬る。

あっさりと棒切れのように、ムオラの剣が二つになった。

驚き、一歩後ずさった。

後を追いかけるように、右下からの袈裟切り。

それで終わった。

11 旅立ち

「終わったな」

血の臭いとうめき声の中、ポツリと言う。

人は胴が切れた程度ではすぐに死なない。もちろん即ししない、という意味で。

彼らは数分、苦しみの声と怨嗟の声をあげる。

運よく手が繋がっている奴は、自ら止めをさす。

カルシアが彼らにとどめをさすことは無かった。

——今まで人を不幸にした分、最後は苦しみながら死ね。

そう考えているのだ。

「いや……あいつを忘れていた」

胴が半分になり、うつろな目を浮かべているムオラから目を離す。

彼はまだ微かに息があったようだが、すぐに死ぬ。

止めを刺すようなことはしない。

——苦しみながら死んでいけ。

彼はそれだけの事をしたと思っている。

裏切り続きの人生。

傭兵としてかなりの腕を持ちながら、多くの国から疎まれ続けた男。

最後には数人の仲間と国の千人将を襲撃し、盗賊へと身を落とし、
た男……

——八つ当たりは駄目だろ。

リーラのさらに向こうで、寝ている油顔男に視線を移した。

ゆっくりと近づいていき、横に立つと剣を振るい、首を落とす。

「これで完全に終わりだ。さて帰るか、リーラ？」

リーラに視線を移す。

酷く表情が強張っていた。

「俺が怖いかな？」

まっすぐにじつと見つめる。

リーラは肯定も否定もしなかった。

代わりに微かな怪しい光を目に湛えている。

「……力って怖いですね。こんなに人が死んで……」

「こいつらが死んだのは自業自得だ」

「あ、カルシアさんを責めてるんじゃないんです。ただ……力がな
いと、こうも一方的なのかなって」

「だから力のあるやつが守らないといけないんだ……」

思わず苦々しく、吐き出すように言ってしまう、顔を顰める。

「……そうですよね」

頷き、黙り込んでしまった。

ふうっと一息を吐く。

「……帰るか」

村に戻る道すがら、カルシアの横にはミクリが飛び、数歩分ほど
遅れてリーラが歩いている。

何かを考えているようで、彼女は一切喋らない。

ミクリは元々あまり喋らないので、いつも通りだと言える。

彼女が声をかけてきたのは、そろそろ村が見え始めるかどうか、
という頃合いだった。

「カルシアさん、ちょっといいですか？」

「どうした？」

立ち止まり、振り返って問う。

すると彼女の真剣な表情が目に入った。

どこかしら、やつれてもいる。

人を殺すところを初めて見たのだろうから、それは仕方の無いこ
とかもしれない。

「いつ村を出るんですか？」

「夜が明けたら」

「そんなに早く……」

一度目を瞑り、俯く。

しかしすぐに顔を上げた。

「私も連れて行ってくれませんか？」

「何じゃと？」

驚いたのはむしろミクリだった。

「どうしてそんなことを？」

「カルシアさんから旅の話しを聞いて、憧れたんです。私の知らないこと……世界、知識……そして力。私、何も知らないんだなあって」

「世界を知りたいから、旅に出たいのか？」

「確かにそれも目的です。……だけど、私はそれ以上に力が欲しいんです」

ぎゅっと手を握り締めた。

「大切な人を守るための力……ただ逃げるだけ、守ってもらうだけは嫌なんです」

「……その何が悪い？ 逃げること、守ってもらうことが」

リーラが首を横に振る。

「良い悪いの問題じゃないんです。私は守るための力が欲しいんです」

真っ直ぐと見てくる。

「正気か、お主」

「正気です」

「旅は楽しいばかりじゃないぞ？ 辛いこともあるし」

「分かってます」

「分かっておらん。しかも基礎が出来ているならともかく、力を求めるためなぞ——」

ミクリが説得を始める横で、二人の会話を聞きながら、ようやく気がついた。

——力への羨望。

時々見せていた、瞳に光る怪しい光。

あの父親だ、きっと今まで大切に守られてきたのだろう。
それがこの子を真っ直ぐに育て、反面守られることへの反発が生
まれた……

ここで断ってもいい。

とても旅に耐えられるような力を、この子は持っていない。

だが断れば……この子は将来駄目になる。

分かるだけに迷う。

どちらがこの子のためになるのか……

「――で、カルシアはどうするんじゃ」

急に話しを振られ、ハッとミクリを見返す。

気がつけば、リーラもこちらに綺麗な目を向けていた。

「何じゃ、聞いとらんかったのか。お主が珍しいの」

「すまん。それでどうした？」

「結局のところ、お主次第、ということじゃ。お主の結論に従う」

なるほど、こちらに投げたのか。

「そうだな……」

しばしの沈黙。

ミクリもリーラもじつとカルシアを見る。

そして結論。

「ニグアルが構わないと言えば連れて行こう」

とたんにリーラの表情ぱあっと笑顔になる。

反対にミクリは顔を顰めている――ように見える。

「良いのか、それで」

「ああ」

放っておくと駄目になることが分かっているなら、連れて行った
ほうがいい。

――幸いにも俺と同行する。ならよっぽどの事が無い限り守れる。

カルシアはそう考えたのだった。

軽い足取りのリーラ、ぶすつとした顔のミクリと共に、村に帰っていった。

「行かせてよ！」

「駄目だ！」

このやりとりがどれほど続いただろうか。

ミクリは眠そうに時たま欠伸をしている。

村に戻った当初は村人全員が驚き、続いて喜んでいた。

思い思いに手にしていた武器を投げ出し、大騒ぎだ。中には泣き声も混ざっていたが。

どうしてもっと早く殺してくれなかったのか。

逆恨みもいいとこだ。

そんな彼らを横目に、上機嫌なニグアルと共に、彼の家に行った。だがリーラが旅の話を切り出したことで、彼の怒りが一瞬で沸点を越えた。

そしてこのやりとりが延々と続いている。

説得はリーラがするべきだろうと思っているので、カルシアはほとんど口を挟まないようにしていた。

「私は今のままじゃ嫌なの！ 何も知らない、力もない。それを変えたいと思うのが何で駄目なの！？」

「駄目に決まってるだろ！ そんな危ないこと、絶対に許さん！」

怒声がずっと飛び交っている。

こうなる予想はしていた。

だがそれでも、変わりたいと思うなら最初に乗り越えるべき壁だろう。

——これも修行の一つ。

そう思っていたのだが……どうにも違和感が出てきた。

ニグアルの主張は一貫している。

行くのは許さない。

それだけだ。

普通、だとは思う……おかしいところはない、気もする……

——だがどこか……

違和感の正体がつかめない。

あまり気にしなくてもいいのかもしれないが……

「リーラ。後は俺が話してみる」

「え？」

今まで黙っていたカルシアの、突然の提案にリーラが驚く。

まじめに交渉するつもりなどあまり無いのだが、少しニグアルと
一対一で話してみたかった。

「ちよっと二階に行ってももらってもいいか？ ついでだからミク
リを連れて。もう眠そうだからな」

「……はい、分かりました」

リーラが机の上でぐたっとなっていたミクリを抱き上げ、二階へ
向かう。

何度か不安そうに振り向きながら。

完全に姿が消えると、防音の魔法をかけ、音が洩れないようにし
た。

だがニグアルにはその魔法を伝えない。

「リーラを旅に出すのが、それほど嫌か？」

「当たり前だ」

むすっとした答え。

譲る気はないというのが見て取れる。

「危険だからか？」

「そうだ。娘を危険な旅に出したい親などおらん」

「ふん、確かに。だがあの子は変わったがっている。守られてば
かりでは駄目だと気付いたんだ。それを応援するのも親じゃないの
か？」

「親が子を守るのは当然だ。カルシアさんといえど、私は譲る気は
ない」

断固とした口調。

思わずため息がでる。

「子の成長を願うのも親だと思うがな」

「私は安全を願っている。何かおかしいか？」

「いや。それはよく分かる……そうだな、条件付ならどうだろう？」

「条件？」

「ああ。あの子、養子って話しだからな。本当の両親の元に連れて行ってから、すぐに返すというのは——どうかしたか？」

ニグアルの視線が泳ぎ、顔を僅かに顰めた。

「……あの子の両親は死んだよ」

すぐに取り繕ったが、カルシアの目には、異常にしか見えなかった。

——動揺？ 何故？

「両親が死んだ、か」

——まあ分からない理由ではない。

だが反応がおかしい気がする。

リーラの様子だと両親のことは覚えていないのだろう。

もしくは覚えていても、微かな記憶のように見えた。

それほど昔なら、ニグアルの中でも心の整理は十分できているはず。

どうということだろうか。

「死因は？」

「……盗賊に襲われて、な」

「……今回の盗賊たちのような？」

「似たようなものだ」

声音に動揺は無い。

「そうか。可愛そうなことだ。犯人はどうした？」

再びニグアルの視線が泳ぐ。

だが先ほどよりは短い。

「まだ捕まっていない」

「そうか……」

一つ、閃いたことがある。

突拍子も無い話しだが、あり得なくは無い。

「なら教団に調査させよう。時間はかかるだろうが、何とかなる」

「それは……」

ニグアルの口がパクパクと動くが、うまく声になっていない。

その様子を見て確信した。

――三日後。

ミクリが隣を飛び、反対側にリーラが歩いていた。

「本当にありがとうございます。父を説得してくれて」

「何、たいした事じゃない」

リーラが目を輝かせながらお礼を言う。

希望に満ちた目。

見ていてまぶしくなる。

カルシアはあの後、ニグアルの承諾を得たため、リーラを連れて行くことが決定した。

ただしリーラは初めての旅ということもあり、準備に一日時間を費やした。

さらに次の日には村の皆に見送られての出立。

ニグアルのみ苦々しそうな表情を浮かべていたが。

そして今。

リーラにとって初めての野宿をした後の昼。

もう何度目かになるカルシアへの御礼からしばらく経った時、

「カルシアさんってどれぐらい旅、続けてるんですか？」

唐突に訊いて来る。

「もうどれぐらいになるか、分からないほど」

リーラに視線を向けると、なぜかキョトンとした目を向けていた。
「どうした？」

「いえ……」

「遠慮はいらない」

「えっと、それじゃ……なんでまた森に迷うなんてことに？」

「……ミクリのせいだな」

ミクリがそっぽを向く。

知らん振りを決め込むらしい。

「ミクリの？」

「ああ。知識はあるくせに、生まれたてだからな。初めて見るもの全部、興味深いんだ。俺の制止も聞かず、どんどんと森の奥に、な」

「知識はあるのに、生まれたて、ですか？」

「そういう種族だと理解しておけばいい。ちなみにミクリはまだ生まれて三年目だ」

「三年目！ まだ赤ちゃんみたいなものなんですね」

「誰が赤ちゃんじゃ、馬鹿者」

ようやくと喋ったミクリに思わずリーラが苦笑する。

楽しいひと時。

だが彼女はまだ知らない。

カルシアの苛烈さを。

それを知ることになるのは、かなり先のことになる。

閑話 末路

カルシア達が村を出てから二十数日が経っていた。
ニグアルは忌々しそうな表情で、街道を歩いている。

「くそっ！ どうしてこんなことに……」

あの死神が来るまでは順調だったのだ！

私の財産があいつのせいで！

最初にあいつの実力を知った時は、小躍りしたくなったものだ。
高レベルな魔術師。

あいつをうまく利用すればムオラどもを倒せる。

もし死神が死んでも、盗賊も無事ではすまない。

そこをたたく計画だったのが、結局死神一人で全滅させてしまった。
た。

そこまでは良かったのだ。

なのに！

心の中だけでなく、口にだしても思いつく限りの罵詈雑言を、カルシアに対して浴びせていた。

「私が何年かけた計画だと思ってるんだ！ あのクソ野郎！」

ぶつぶつと傍目からみたら非常に危険な男に見られただろう。

だがうまい具合に誰ともすれ違わなかった。

その男に出会うまでは。

気がついたときには、一人の青年が街道の少し先に立っていて、
どれほどの距離も無い。

ニグアルが彼を見たとき、病気かと思った。

それほど顔が白かったのだ。

だが心配したのは一瞬だった。

青年がマントを羽織っているのを見て、カルシアを思い出したからだ。

無関係と分かっている、つい忌々しく思ってしまう。

睨みながらすれ違おうとした時、声を掛けられた。

「ニグアルさんで合ってる？」

何気ない調子。だが背筋の凍るような声。

恐怖で動けなくなる。

否定したかったが、口が動かない。

「ニグアルさんで合ってるね」

質問ではなく断定。

「さてと、それじゃ審判を行いますか」

いつの間にやら、男のすぐ傍を竜が飛んでいる。

小さな真紅の竜。人の頭程度しかないような。

「わ、わたしはニグアルではない……」

やっとそれだけ言えた。

だが青年は聞こえていないように続ける。

「村人の一人から証言を得た。曰く、ニグアルは村の利益のため、盗賊と組み一組の獣人の夫婦を殺傷した。同じく自白も死神カルシアに対して行った。証拠として、殺害された獣人夫婦の販売ルートが判明したと同時に、ニグアルの作った墓には何も存在しなかったことを確認済みである。よって判決はジャッジによる断罪とする」

終始、抑揚の無い言い方。

だがニグアルは全てを察していた。

「ば、ばかな……カルシアは私を見逃すと……」

「あの人が重罪人との約束、守るわけないでしょ」

マントの内側から短剣を取り出しながら、呆れた声をだす。

「それにしても、君相当悪だね。確かに獣人はうまく売れたら、十年ぐらいの養育費なんて数分の一程度だもんね。リーナ、だっけ？ その子に何も教えなかったのは、そっちのが都合がいいからかな？」

ゆっくりと青年が一步を踏み出したため、一步下がる。

足が震えて、逃げ出したいのいうことを聞かない。

「カルシアさんが討伐した盗賊団と組んでたんだもん。性質悪いよ

ね。しかも昔の事で脅されて、我慢できなくなって討伐隊？ それで大目に見てもらってたリーナ……やっぱり間違ってる気がするなあ。まあいいや、その子まで要求されるんだもん。自業自得だよな」

そう言う間も一歩、一歩と迫ってきて、その度に下がる。青年が短剣を引き抜くと、薄い赤をした刀身が現われた。

「ひっ……」

思わず小さな悲鳴をあげる。

もはやニグアルの顔色は、目の前の青年よりも白い。

「しかもほとんど村ぐるみって言ってもいい犯罪だし。知らなかったのって若い連中だけなんでしょ？ 結局生き残ったの、十人いないんだもん」

「お前ら、まさか……」

「ん？ あんたの村の連中はほとんど殺したけど？ ジャッジは使わなかったけど。何しろ村が壊滅状態だからさ。結構時間かかったよ、皆あちこちに移住始めてるし。あんたもその口でしょ？」

また一歩。

ニグアルもまた下がろうとしたが、つまずいて尻餅をついてしまった。

「……お喋りが過ぎたね。またカルシアさんに怒られるかな？ まあばれなきゃいいか。それじゃ、バイバイ」

短剣を素早く横に一閃し、ニグアルの首が落ちた。

閑話 末路（後書き）

少々長くなりましたが、これにて序章は終了です

一章はプロットが出来次第、書き始めます

お気に入り登録や評価をしていただけると、作者が歡喜いたします
のでよろしくお願いします

01 剣術修行

「大丈夫、大丈夫……」

リーラは目を瞑り、しっかりと自分に言い聞かせ、カルシアに買ってもらったばかりの細身の剣を、しっかりと握り、構える。

安物と言っていたので、剣としての能力には欠けるものの、練習用としては十分だった。

——教えられた通りにやれば大丈夫……

目を開けると、目の前に美しい少女が立っている。

リーラと比較しても全く遜色が無い。

紅玉のような澄んだ緋色の目と、頭の後ろで結んだサラサラの深紅の髪。身長はリーラと同程度。

どこを取っても美しいという形容が相応しい。

リーラはこれほど美しい少女を今までに見たことが無かった。

それが例え、不敵な笑みを浮かべていたとしても。

それが例え、漆黒の刀を向けていたとしても。

リーラが目を開けるのを待っていたかのように、少女が口を開く。

「そろそろ行くぞ」

「はい」

リーラが緊張した声で答えると、少女が構え直し、次の瞬間にはその姿が大きくなる。

無駄が一切省かれた動きで突っ込んできたのだ。

だがリーラにそこまで理解する余裕は無い。

突然姿が大きくなったようにしか見えなかった。

少女が横なぎに刀を振るい、黒い軌跡を描きながら襲い掛かる。

辛うじて剣を立て、防ぐ。

重さはほとんど無い。

うまく受けられたことにほっとしたのも束の間、すぐに上からの斬撃。

慌てて受ける。

キン。

鋼同士のぶつかる高い音が響いた。

——冷静に……練習通りに……

自分に言い聞かせるが、まともな思考にならない。

だが練習通りには動いていた。

彼女の努力の賜物である。

少女が袈裟切りに斬りかかってくる。弾く。

すぐに次の攻撃。また、防ぐ。

少女は防御されるたびに、少し顔を顰める。

いかにも腕力の無さそうな少女だ、実際動きは速いものの、威力が全く乗っていない。威力があれば、リーラの剣などとつくに弾かれていただろう。

一撃一撃を確実に防ぐ。

徐々に少女の速度にも慣れ始め、余裕が出始めたそのとき、

「もう少し早くするぞ」

と声を掛けられた。

——まだ速くなるの?!

正直勘弁して欲しかったが、口に出すより先に、少女の剣速の方が早くなった。

ほんのわずかだけ。

だがリーラには倍の速度にすら感じられる。

何とか受けているものの、いつ斬られるか気が気じゃない。

「足を使わんか」

少女の声でようやく最初の位置から動いていないことに気がついた。

上から来た攻撃を避け、そのまま少女の側面をつけるよう、移動する。

だが少女の速度の方が圧倒的に、速い。

まるで避けられることも計算済みだったような、体勢の立て直し。

すぐに体を振り向かせざま、横なぎに振るってくる。

「きゃっ！」

おもわず目を瞑り、小さな悲鳴を上げたが、何とか防御した。

また高い金属音が響くが、重々しい音はしない。軽くぶつかったような、そんな音が何度も続いていた。

「目を瞑るな！」

少女から叱責が飛ぶ。

その声に反応して、慌てて目を開けた。

少女が再び目に映る。少し距離を取り、刀を下ろしている。不敵な笑みは消え、まじめな表情をしている。

「戦いの最中に目を瞑ってどうするつもりじゃ！」

「ご、ごめんなさい！」

思わず首を竦める。

初めての実戦形式の訓練。

少女もそのことは分かっているのだが、怒らずにいられないミスだったのだ。

「戦いの最中に目を瞑るなど、言語道断！ その間に斬られたらどうやって防御するつもりじゃ！ ボケ！ そんなことがあっても、相手をしっかりその目を見開いてよく見とけ！ たわけが！」

リーラは身を縮めるしかない。

全くもってその通りである。

今は訓練なので攻撃されなかった。それだけのこと。実践であれば斬られるのが分かりきっている。

リーラをじっと見ていた少女だったが、ふうと呆れたようなため息を吐く。

次の瞬間には再び不敵な笑みを浮かべ、刀を構えなおしていた。

「説教はこの程度にして、続けるぞ」

「は、はい！」

力いっぱい答え、リーラも構えなおした。

今度は目を瞑らないよう、しっかり気構える。

せつかく相手をしてもらっているのに、あまり情けないところを見られたくも無い。

「今度はお主から来ると良い」

「はい！」

返事と同時に少女へ突っ込む。

「たぁ！」

気合の声と共に、上から斬る。

斬るというより、叩くという表現の方が正しいような、ぎこちない動作。

避けようと思えば、少女にとって容易い。

だがあえて受けた。

リーラは手に強い反動を感じた。

少女が顔を顰める。同じように反動を感じたのだろう。

きつと自分も同じような表情をしているのだろう。

だが怯んでいられない。

また怒られる。

すぐに逆袈裟切りに斬る。

少女は今度は受け止めず、後ろに下がることで避ける。

白銀で描かれた弧をやり過ぎた少女は、前に出る。

リーラは剣をあげたままのうえ、避けられたため勢いに負け、体勢を崩している。

とっさに足を使うことを思い出した。

何とか後ろに飛ぶ。だがとても避けられるようなものでもない。

少女が追いかけてくる。

そのまま大きく刀を横なぎに振るう。

漆黒の弧がリーラを襲おうと、迫ってくる。

——防御が間に合わない。

そう思ったと同時に、リーラと少女がそれぞれの方向に、吹き飛んだ。

二転三転と転がったが、草が生えていたため、大して痛くは無い。

ハッと自分がやらかしたことに気付き、慌てて少女の方を見る。
彼女は自分と同じく起き上がるところだった。

頭でも打ったのか、片手で後頭部を抑えている。

「——っ！ 馬鹿者！ さっきよりなお悪いわ！」
涙目になりながら怒鳴る。

「剣の訓練だと言っとるだろうが！」

「ごめんなさい！」

平謝りするしかない。

立ち上がり、ペコペコと頭を下げる。

「まったく……」

ふうっとため息を吐かれた。

呆れられている……

「今日はもう終わるかの……」

「はい……」

自分のせいなのだから、もはや頷くしかない。

多少気落ちしながら、今日宿泊する近くの村に、並んで戻る。

「それにしても、あれじゃの。お主、腕上げたの」

「カルシアさんの指導がいいですから」

少し微笑みながら答える。

「まあ教えるのはうまいからの、あやつは」

「やっぱり実力あると教えるのも上手いですよね」

「いや、そういうわけでもないじゃろうが」

「……ミクリも相当強いですよね？」

隣の美少女、ミクリに向かって少し恨みを込めて言う。

以前弱いと言っていたのは全くの嘘っぱちだった。

対してミクリは全く悪びれず、

「人の姿の時はの」

などと答えた。

彼女の様子を見て、思わず天を仰ぐ。

雲の無い、綺麗な青空が目映る。

「……この十日、いろんなことを教えてもらいました」

「まだまだお主の知らんことは多いぞ」

ミクリがにやりと笑う。

「はい。とっても楽しみです」

ミクリに笑みを投げかける。

本当に楽しみなことだった。

だが……

少しだけ、不安になり、思わず顔が少しだけ曇る。

ミクリはその表情を見て、小首を傾げる。

「……カルシアさんはなぜ別行動しよう、なんてことを言ったんでしょうか？」

ああ、とミクリが頷き、次に苦笑した。

「あれはよくあることじゃ。特に弟子を取った時にはの」

「私が弟子、ですか？」

ちよつと驚いた。

自分の感覚では弟子というより、付き人だったからだ。

なんでもないようにミクリは続ける。

「そう、弟子じゃ。そしてあやつは弟子にはかなり厳しい。それこそ千尋の谷に突き落とすような、な」

ミクリが体をぶるつと震わせて、両手で二の腕をさすった。

何か嫌なことでも思い出したのだろうか。

表情が少しだけ、こわばっている。

「まあ、そういうことじゃ。あまり気にしなくて良い。それよりどんな目に遭うか、覚悟だけはしといた方がいいの……」

語尾が弱い。

まるで自分に言い聞かせているようで、少しおかしかった。

一応ミクリに頷く。

カルシアの居ない、初めての旅。

その提案がなされたのは、今日のことだった……

02 知識と魔法

この十日で様々なことを教えてもらった。

とは言っても、身近なものの知識についてが主だ。

例えば、マクル草で作った睡眠薬。

今思えば、マクル草だけ持って行ったことが恥ずかしい。ムロウスの種もあんな扱いして、あとから背筋が凍る思いをした。

そういう知識は森の近くに住んでいるなら、知っているべき知識だったらしい。

子供がへたに口に含んだりしたら大変だから。

顔から火が出る思いで、教えてくれなかった両親をほんの少しだけ恨んだ。本当に少しだけ。

魔法や剣術についても教えてもらっている。

守るための力が欲しいから。

剣はあいにく一本しかないため、リーラは持たせてもらえない。

代わりに木の棒を使い、型だけ真似ていた。

まずカルシアがゆっくりと斬る動作を見せ、それを真似る。

防御も同じように。

リーラのためか、カルシアはよく休憩を取るので、その時に何度も棒を振る。

おかげで掌には血豆ができているが、リーラは気にしていない。

とにかく繰り返し練習する。

カルシアはその間、型を間違えないように近くで見えてくれた。明らかにおかしい時は後ろから回って、手を添え矯正する。

本当に寝る間も惜しんで練習したため、疲れてヘトヘトになるのが当然だったはずだが、カルシアが何かしたらしく、ほとんど疲れは無かった。

魔法についても教えてもらった。

魔法は魔力がなければ使うことができない。

それぐらいの初歩はリーラも知っていた。だが世の中には魔力の無い者の方が少なく、大抵は教えてもらえれば使用できるというのは初耳だった。

「魔法は自分の中の魔力を理解することで使うことができる」というのがカルシアの言いようだったが、リーラにはよく分からない。

だが今は理解できなくていいから、とにかく覚えておけと念を押された。

そして実際に魔法を教えてもらうとき。

カルシアが後ろから回り、リーラの両手首を掴み、前に突き出させる。

剣術を教えてもらうより前の話で、男の人とこれほど密着した事が無いリーラは、少しどきまぎしながらも、カルシアの言葉に耳を傾けていた。

「いいか。今からお前の中の魔力を、俺の魔力で無理矢理に操作する。お前は自分の中の魔力の動きをしっかりと感じていろ」

そう言われたが、感じろといわれてもさっぱり分からない。

次の瞬間までは。

カルシアの掌が温かくなると同時に、自分の中の何かがうごめいた。

体の中心から何かが湧き上がってくるのを感じ、それが掌に向かって真っ直ぐに伸びていく。

掌に何かが集まる。

何かよく分からないが、気持ちの悪いものではない。むしろ心地良い何か。

これが魔力なのだろうと思った。これを理解する、というのはやはり分からないものの。

掌に集まっていた魔力が掌を離れ、目の前に集まり、小さな光の塊になった。

「すごい……」

わずか小さな光の塊。

だが自分の魔力でだしたことに感動していた。カルシアと密着しているための緊張などどこかに吹き飛んだ。

少しだけ、自分の意識で力を増してみると、光が少し大きくなったことに、また感動した。

「今、光の塊になっているのは、俺が操作しているからに過ぎない」「はい」

返事をする、とたんに光の塊が消え、自分の中から魔力が消えた感じがした。

「光にしたのは魔力を目で確認しやすいからだ。次が魔力を操るうえでの基本になる」

「はい」

「目を瞑って、しっかり自分の中の魔力を感じろよ」

言われた通りに目を瞑り、魔力そのものに意識を集中する。

光の塊をだしたことで、魔力を感じることはできるようになっていた。

自分の奥深くで眠っているように、静かな魔力。

それがゆつくりと目覚め、全身を包むように広がる。

肉体に魔力が充実し、心地よい。

全身を覆っていた魔力が、掌に集まり始める。

すでに光を生み出した時の魔力の量を超えていく。

突然、堰を切ったように魔力そのものが前方へ流れ出て、驚きのあまり目を開いた。

サアツとまるで風が吹いたように、草が靡く。

「魔力をせき止め、放出する技術だ。これを応用すると衝撃波になり、人を飛ばす程度の威力になる」

リーラは嘆息する。

魔力の操作。

カルシアに手伝ってもらったとはいえ、自分でやったことに驚いていた。

カルシアが両手を離れたとき、ぱつと振り返ると、カルシアが多少仰け反った。

「……一人でやってみるんで、見ててもらってもいいですか？」

「あ、ああ。やってみろ」

カルシアが勢いに押されたように答える。

キツと再び正面に向き直り、両手を前に突き出すと、両目を再び瞑る。

集中。

自分の中から魔力を引き出す。

カルシアの手伝いが無い今、ひねり出す、と言った方がいいかもしれない。

魔力が全身に広がり、心地よさが広がる。

掌へとそれを収束させていくが、魔力の動きがぎこちない。

掌に収束しきった魔力をさらに強くしていく。

十分強まりきったとき、それを一気に解放した。

「キャッ！」

リーラが後方に吹っ飛ばされたが、カルシアが両肩を抑えてくれたため、数歩下がった程度で済んだ。

「ご、ごめんなさい」

慌てて離れると、カルシアに頭を下げる。

恐る恐るカルシアの顔を見ると、険しい表情をしていた。

カルシアの表情は実は分かりにくい。本人がどう思っているのかは知らないが。

少なくとも、リーラから見たカルシアの笑みは、口の端が少し上がるだけで、判断がしにくいのだ。

ついでに言うとかルシアの笑みは作り物めいていて、どうにも怖い印象を与える。

それはともかく、今のカルシアは眉根を寄せ、はっきりと表情を作っていた。

「あの……」

「いや、何でも無い」

何でも無いということはない気がしたが、口にはしなかった。

ただしこの十日間、魔法の修行をする時だけは、カルシアが特に注意していた、という気はしている。

魔法や剣術の他にも知識として少し教えてもらった。

教会についてはほとんど教えてもらっていない。

まだ早いとか。

代わりに今、カルシアの横を飛んでいる小さな竜について教えてもらった。

メモリードラゴン。

それがミクリの竜としての種族名。

記憶と記録を司る竜。

見たものの全てを覚え、記憶を他人に見せることもでき、凶器に触れれば二十四時間以内にその凶器が殺した人物を視る事ができる。

メモリードラゴンの蓄えた記憶は、十二分に証言能力を備えており、だからこそ死神の補佐役として勤めている。

死神は人を殺すことが仕事なので、死神の集めた証拠、実行を確実に見届け、本部に報告する義務がメモリードラゴンには課せられている。

とはいうものの、本当に重要な仕事はこれらではない。

メモリードラゴンの本当の役目。

それは死神の「ジャッジ」使用の監視。

死神専用武器であるジャッジは大きな使用制限がある。

第一に証言、第二に証拠、第三に犯人の自白が必要となり、これらを揃える必要がある。自白だけではできれば欲しい程度だが、他二つは必須である。

証言を誰から得たか、証拠は何か。

メモリードラゴンの前で宣言してからしかジャッジは抜いてはならない。なおかつ、どちらもメモリードラゴンに見せていなければ

ならない、という制約のおまけつきだ。

証拠にかぎれば、相手の武器を触り、何人殺害したか確認するということもできる。

ただし武器が殺した者しかわからず、別の持ち主が殺した可能性はありうるため、有力な証拠とまではいかない。

この場合は状況証拠と合わせることで、有力な証拠として昇格する。

カルシアが盗賊団を相手取った時などは、この場合に当てはまる。また、カルシアがムオウを斬る前にした審判こそが、ジャッジを抜くための儀式にあたる。

審判をせずにジャッジを抜くことができないわけではない。

だが後から発覚した場合、教会の規則により死刑となるので、実質的にできないといえる。

常に肌身離さずという命令も出ているらしく、ジャッジを下ろすこともあまり許されないらしい。カルシアはわざと脅迫されたという名目を利用して、時々手放すらしいが。

ジャッジは重罪人用の武器なのである。

そのため死神は複数の武器を所持するのが普通らしい。なのでカルシアは右腰に刀を差しているらしいが……

「カルシアさん、ちょっと訊いてもいいですか？」

「どうした？」

「カルシアさんっていくつ武器持ってるんですか？」

次の街へと向かっていたカルシアの足がピタッと止まった。

あわせてリーラも止まる。

「……よく分かったな」

「え？　だって後ろから見てたらよく分かりますよ。腰のところに何か、棒みたいなのがあるって」

「そうなのか？」

カルシアが再び歩き出したので、リーラも足を動かす。

「全部で三本だな。ジャッジと刀と小剣」

「そんなに」

「俺の場合は、もっと違うものを使うが――」

そこで言葉を気切り、目を僅かに細めた。

どうしたのだろうかと思い、リーラも視線の先へ目をやると――

「村ですね。私の村以外のところって初めて来ました」

胸が高まるのを感じた。

全く知らない新しい村。

「あそこが目的地ですか？」

カルシアが首を横に振る。

「いや。だが休むのには適しているな。今日はあの村で休むか」

「はい！」

それが昼頃の二人の会話だった。

03 小さな村にて

カルシアは村唯一の宿屋を借りると、部屋で休むことなく、すぐにそこを出た。

待っててもいいと言われたのだが、今のリーラはもはや好奇心の塊で、留守番なんてするつもりはなかった。

「どこに行くんですか？」

前を歩くカルシアに尋ねる。

キヨロキヨロと周りを興味深く見て回っているので、少し遅れるのだ。

そんなリーラにちよいちよいとカルシアが手招きした。

小走りで横に並ぶ。

「この村は教会の保護下にあつてな。そういう村の飛脚屋には、教会からの指令が届いてることが多いんだ。他にも教会にジャッジを抜いた報告をしないといけない。だから今回はその確認と報告だな」「へえ。そうなんですか」

リーラの住んでいた村にはそんなものは無かったと思う。確信は持てないにしても、教会との関係は強固ではなかった気がした。

「でも記憶石っていうのが無いと、報告しても意味無いんじゃないですか？」

報告したところで、ミクリの記憶が無いと真偽が分からないはず。記憶石というものにメモリードラゴンの記憶を写し、魔力を込めた手で触ると他の人にも見ることができると聞いた。

見せてもらおうと訊いたところ、カルシアの返事は「今は持っていない」と言っていたはずだ。

「それも飛脚屋においてあるんだ。三つぐらいな。つと、あそこだな」

小さな村だ。すぐに小さな建物につき、外で待っているよう言われた。

記憶石を見たかったので、少しせがったがあっさりと駄目だと言われてしまった。

教会からの指令の中には、人に見られたらまずいものもあるらしい。

仕方なく、建物の外で佇み、出てくるのを待つ。

……長閑だった。

ぽかぽかと陽気が気持ちいい。

——自分の村よりも少し静かな？ 人はこっちの方が多いけど。周囲を見ながら、いろいろと自分の村と比べていく。

往来はこっちの方が少ない。

けど若い人は多いかな。

そうやって観察で時間を潰していたが、さすがに飽きた頃、ようやくカルシアとミクリが出てきた。

かなり長い間入っていたと思う。

カルシアがほんの少しだけ、難しい顔をしていた。

何かあったのだろうか？

ちよつと聞いてみたい気もしたが、考え事をしているようなので、声をかけることは気が咎めた。

代わりに「行くぞ」とカルシアに声を掛けられ、先にスタスタと歩く彼を走って追いかけた。

しばらくそのまま後ろを歩いていたのだが、ふと疑問に思った。

「カルシアさん、どこに行くんですか？」

どうにも宿の方向ではないのだ。

「ちよつと二カ所ほどまわるぞ」

「はあ」

何でも無いように言うカルシアだった。

ミクリをちらりと見ると、この竜も分からないようで、小首を傾げるような動作をしている。

ミクリは普段はあまり喋らない。

何故か聞いたところ、人とは声帯がかなり違うので、声を出すの

は意外にしんどいのだとか。それでも喋る時はよく喋っている気がする。

目の前を歩くカルシアは、キョロキョロと辺りを見回し、何かを探している。

彼もこの村に詳しいわけではないらしい。適当にブラブラしているようにすら見える。

そのうちに目的のものを見つけたようで、一つの建物に入っていた。

今度は待っているとわれなかつたので、リーラも続いて入る。

「武器屋ですか？」

訊くまでも無いきがしたが、思わず口からでた。カルシアが少しだけ頷く。

四方の壁に剣が飾られ、中に入る人を威圧しているようだった。

「教会運営の武器屋だ。村で運営するのは珍しいんだが、運がよかったな」

カルシアが樽に何本も無造作に入れられた剣を一本取る。普通の剣よりも幾分か、短めだ。

鞘に入れられた剣を抜いて確かめ、

「まあ、これでいいだろ」

そう一人ごちると、本を読んでいた店主の前まで剣を持って行った。

少ししてすぐに戻ってくる。

「もう出るぞ」

「もうですか？」

入ってからごく僅かな時間だった。

聞き返す間にもカルシアはさっさと出て行ってしまい、慌てて後を追う。

店を出ると次の場所へと歩み始めていたカルシアの隣まで走る。

「もう一本持つんですか？」

三本も持っているのに、と疑問を口にする。

すると思わぬ答えが返ってきた。

「これはお前のだ」

「私の？」

「そうだ。練習用に必要だろ？」

「は、はい！」

思いもよらぬことで、目頭が熱くなる。

剣を貰って喜ぶのもどうかと思うが、嬉しいものは嬉しいのだ。

「所詮練習用だからな。適当に選んだが、俺が認めるぐらい上達したら、もっと上質な剣をやるよ」

「はい！ きっと認められる実力をつけてみせます！」

はち切れんばかり声を聞いて、カルシアは少し微笑んだようだった。いつもの、作り物のような笑みだったが。

次の目的地にはすぐに着いた。衣服屋だった。

新しい服でも買うのかと思いつながら、着いていく。

カルシアは真っ直ぐに店の主人のところまで行き、話しかけた。

「この子に合う大きさの、男物の服が欲しいんだが。旅に適している服を頼む」

隣までやってきたリーラの頭に手を置く。

「男物ですか？ はい、かしこまりました」

主人は不思議そうに首を傾けたが、お客の注文を取るべく動き出した。

店に飾っている服をすぐさま選び、カルシアの前まで持ってくる。

「これでよろしいでしょうか？」

カルシアの前で広げてみせる。

「ああ。それでいい」

代金を払うと、すぐに店を出て宿屋に向かった。

リーラはまた貰えるのだろうか、胸をドキドキさせながら。すでに腰に佩いた剣に思わず触れる。

「言っておくが、この服はお前のじゃないからな」

リーラの考えなど見透かしたように、歩きながら宣言されてしまった。

だが同時に疑問が起こる。

それじゃ誰に？

「まさかお主……」

ミクリが嫌そうな声をあげる。

カルシアは何の反応もなく、宿屋へと向かった。どことなく無然とした表情のミクリを従えて。

宿屋に戻ったリーラ達だったが、一度部屋に入るとミクリと荷物を置いたまま、すぐに部屋を出た。

宿屋は二階立ての建物であり、宿泊のための部屋は二階。

一階は食堂になっていて、一つの丸いテーブルにつく。

「あの、ミクリはいいんですか？」

「すぐに来る」

「でも、ミクリって扉も開けられないのでは？」

「そんなことはない」

「そうですか……」

自分の知らない能力があるのかもしれない、とりあえず納得しておく。

飲み物だけ注文し、無言のまま数分の時が流れる。

二階のほうからトットトツ、と軽やかなリズムを刻みながら、一人の少女が降りてきた。

リーラは少女を見る。

綺麗な緋色の瞳と目が合った。サラサラの深紅の髪を頭の後ろで結びながら、真っ直ぐこちらへ向かってくる。

——きれいな人だな。

知らず知らずため息が漏れる。だが何故か男装していて妙に思ったが、それでも綺麗なことに変わりはない。

少女は近くまで来ると、リーラ達と同じテーブルについた。

カルシアは何も言わない。

「あの……何かご用ですか？」

カルシアが何も言わないなら問題無いのだろうけれど、一応声を掛けてみる。

すると深紅の少女はキョトンとした目をこちらに向け、喉の奥でクッククツクツと笑う。

「あの……？」

怪訝に思い訊いてみる。

ちらりとカルシアの顔を見ると――笑っていた。いつもの作り物の笑みで無く、自然な笑みで。

「この姿で会うのは初めてじゃったな」

「――っ！ その声！」

「ミクリじゃよ。ワシは」

可笑しそうに笑う。

「でも、その姿……」

「人にもなれるんじゃない。人の声を出せる者はの」
驚いてまともに口が動かない。

「まあ、そういう事だ」

カルシアがようやく口を開く。笑みはもう消えていた。

「ミクリは人の姿の方が疲れると言って、あまりなりたがらないんだがな」

「おう、なりたくないぞ。喋りやすいがの」

「今回はそうも言ってられない」

「……どう言う事ですか？」

リーラはカルシアの言い様に、どこことなく不吉なものを感じた。

「これから別行動を取る」

「やりの……」

「えーっ！」

ミクリは諦めたような声だったが、リーラは驚きのあまり、外にまで聞こえるような大声を出してしまった。

幸いにも店内に誰もおらず、覗きに来るものもいなかった。

「な、何ですか？ 何で別行動？」

矢継ぎ早に聞く。

カルシアは今の保護者だ。保護者と完全に離れて行動するという
ことに、驚きと不安を隠せないでいた。

「お前の修行のためだ」

カルシアはあっさりと言い捨てる。

「私の修行？」

「ああ。精神面の修行だ。それには俺が同行していると少々まずい」
「よく言うの……」

ミクリの小さな非難は二人の耳に届かなかった。

「でも、他の修行が……ただでさえ、私、覚えが悪いのに……」

「安心しろ。剣の修行はミクリが引き継ぐ」

「何じゃと？」

「ミクリは竜身なら確かにリーラより弱い。だが人身ならリーラより遥か上の剣術を持っている」

ミクリの声など聞こえていないようである。

「本当ですか？」

代わりにリーラがまじまじとミクリを見た。

信じられないといったふうには。

それも当然である。

身長は自分とほとんど変わらず、体は華奢とすら言え、力が無さ
そう。唯一胸が幾分大きい、それは関係無いだろう。

「それで魔法についてだが、そちらはリーラには魔法制限を課す
しょうか」

「魔法の使用制限ですか？」

リーラは思わず聞き返した。

「そうだ。お前はまだまだうまく魔法を使えていない。それで使う
のは危険だから。俺がいいというまで、むやみやたらと使うな」

「はい、分かりました……」

少々落ち込み気味の返事。

口ではそう言ったが、頭の中が真っ白になる。

確かに自分でもまだまだ魔法がうまく使えていない。

だからといって魔法の使用制限……

様々なことが頭の中をぐるぐるし、しばらくぼーっとしていたよう
うで、突然カルシアから声を掛けられた。

「リーラ、聞いているか？」

「あ、は、はい」

「俺が何て言ったか、聞いていたか？」

「はい、えーっと……魔法の使用を制限するって」

「それは随分前の話した。聞いてなかったのか？」

「えっと……はい、ごめんなさい……」

「まったく」

カルシアが頭を掻き耷る。

「魔法制限が随分とショックだったみたいじゃの？」

「はい……」

カルシアがため息を漏らす。

「別にお前の才能が無いから制限するわけじゃない。危険だからだ。
聞いていたか？ 危険だからだ」

二回目は強く、ゆっくりと諭すように言った。

「リーラは魔法に関しては全く問題は無い。だが今は操る術を見に
つけていない。分かるな？」

「……はい」

あれから何度も魔法の練習はした。基本である魔力を飛ばす術だ。
だがやる度に体が後ろに吹き飛んでしまい、毎回のように体を支
えられていた。

ようやく頭が冷えてきて、カルシアの言っている意味がよく分か
る。

「それと魔法の訓練だが、今のお前なら全身に魔法を行き渡らせる
だけでも十分だ。わかったな？」

「はい」

「よし。それじゃもう一度分かれてからの行動を説明するぞ。今度はしっかり聞いておけよ?」

「はいっ」

意識してしっかりした声を出す。

また聞いてなかったなどと、言っていられない。

「それじゃ復習を兼ねて、ミクリが説明」

「ワシか?」

急に振られたミクリは多少驚いていたが、しっかりと説明を始める。

「カルシアはすぐにこの村を出て、今日中にロトゥールに着くよう目指す。その後ワシらは明日から三日以内につくよう出発。その間はこの村で待機。街に着いたら北門に近いカナリアという宿で一月過ごす」

「一月も?」

驚いて聞きなおしてしまった。

「正確には最長で一月じゃな。もっと短くなることもありうる。宿についたら一週間以内にリーラが目立つように魔法を使うこと」

「え? 魔法の使用制限は?」

「何事にも例外はある」

カルシアが言い、目でミクリに続きを促す。

「他にはカルシアが許可するまで他人の振りをすること。ワシがリーラにしっかりと知識を付けさせること。竜になることの禁止。最後まで生きていること。それぐらいかの」

「最後まで生きていることって……危険なんですか?」

「さて、どうかな? 今の時点だと何とも言えないが、多分危険になるかもしれないな」

「そんな……」

顔が青くなるのを感じた。

「まあ心配するな。ミクリの腕は保証する」

立ち上がりながら作り物めいた笑みを見せる。

「俺はもう行く。金はこれを使えばいい」

差し出された小さな袋を受け取ると、ずしりと見た目に相違して重さを感じた。

「ミクリにはこれを」

腰につけた刀を外し、ミクリに渡す。

「それ渡したら、カルシアさんが困るんじゃないですか？」

「問題ない。それじゃあまたな」

ボロボロのマントを翻し、後ろ向きに手をヒラヒラと振って、店を出て行った。

後には不安そうなりーラと、口笛でも吹きそうな表情をしたミクリが残されていた。

「……いいんですか？」

「あいつには本当に問題無いの。それより、実践訓練でも今からやるかの。今日一日は時間潰さんとならんし」

「はぁ、そうですね」

「それでは行くかの」

ミクリが立ち上がり、先に行く。

リーラは内心不安だった。強いとは聞いたが、見た目は全く強そうではない。

だからといって追いかけないわけには行かず、ミクリの後を追ってリーラも店を出た。

04 ロトウール（前書き）

お気に入り登録、評価をつけていただけたら幸いです

04 ロトウール

カルシアに二日遅れてリーラとミクリの二人は、昼頃に大都市口トウールにやってきた。

次の日にはあの村を出たのだが、予想外に遠く、一日野宿をしてからの到着だった。

この距離でもカルシアなら、問題なく当日についているとミクリが保証する。

「わぁ……」

街に入るための門をくぐったリーラは、思わず感嘆の声をあげた。門をくぐるとそこは馬車が十台ぐらい並んで通っても、まだ余裕のありそうな通りが広がっていた。

真っ直ぐに街の中央へと伸びる大通り。

ずらっと商人達が通りの左右に露店を出していた。

先の方まで人で溢れかえっており、これほどの人を一度に見たことが無い。

ミクリは隣でクスクス笑っている。

「ここは門に近いからの、人の往来が激しい。それだけ人も多いの」

「へえ」

うまく言葉が見つからない。

人、人、人。

人ばかり。

世の中にこれほど人がいるとは思わなかった。

「なんて顔しとるんじゃ。ほれ、とっとと北門に行くぞ」

「あ、はい」

ようやく我に帰る。

入ってきた門は西門なので、少し歩かなければならない。

先を歩くミクリに小走りで近づき、並ぶ。

「あの、ミクリ」

「どうしたんじゃ？」

「なんか、皆がこっちを見てる気がするんだけど……」
僅かに歩いただけだったが、すれ違う人のほとんどがこちらを見ている気がする。

「そりゃそうじゃろ。こんな美少女二人が男装して旅をしとるんじや。目立って当然」

「そうなんですか？」

自分が美少女かどうかはともかく、ミクリは間違いなく美少女だと思う。

だから彼女を見るならまだ分かるのだが……

分かってなさそうなりーラの様子に、ミクリは呆れ顔で説明する。
「女の旅っていうのはお主の考えているよりも、かなり危険なんじや。盗賊に襲って下さいと言うようなものの」

盗賊と聞いてサツと顔が青くなっただが、ミクリはちらりと横目で見ただけで、気にした様子も無い。

危険性を分からせるための、彼女なりの教育だった。

「男装をしているというのは、この街ではあまり目立つ方では無いがな、ロトウールには旅人が集まるからの。男も女も男装しておるのが多い。獣人も他の街よりは集まるが、やはり目立つ。剣を佩いている姿も目立つ。目立つところばっかりじゃ」

「なるほど……」

リーラは少し青ざめた顔で関心すると同時に、疑問にも思っていた。

少しだけ並んで歩いたあと、疑問を口にする。

「ミクリってまだ生まれてから三年目ですよね？ 何でそんなに詳しいんですか？」

「ん？ カルシアに聞いたのではなかったのかの？」

「えっと……何を？」

「ふん。説明を忘れたようじゃの。ワシらは知識を親から子へと引き継がせるんじや。様々な知識と記憶じゃな。だからこの街のこと

も、よう知っておる」

カルシアはそんな説明はしなかった。

本当に忘れていたのだろう。

そうなんですか、と返事をしたあと、黙って街を見つつ歩く。

騒々しい街だった。耳が痛みそうだ。

でも活気に溢れている。

西門の近くは主に住宅街としての役割を持っていて、これが他の街なら静かであるのが常だった。

だがこの街では西と南の門がよく利用されるため、それだけに人通りも自然と多くなる。

彼らを狙った商人達も自然と集まるため、住宅街だというのに、露店があちこちに立ち並んでいた。

リーラは聞いたとおりだと感心しつつ、楽しんでいた。

全てミクリから聞いた知識だ。

彼女もまた興味深そうにキョロキョロと周りを見ていた。カルシアが言っていたが知識があることと、経験することは全く別物らしい。

時々、前から来る人とぶつかりそうになりながらも、しっかりと歩いていく。

「北門ってこっちにあるんですか？」

「今向かっておるのは中央広場じゃな。一番露店の多いところじゃ。今歩いとる広い道は西大通り。中央広場から北大通りに向かえば北門じゃ」

「真っ直ぐ向かった方が早くないですか？」

「他の道は入り組んでおってな、特に住宅街じゃとても道がわからん。市場街ならともかくの。だから一度中央広場に行くほうが速い」

ミクリはそう言ったが、本当にそうだろうかと思ふ。

いくらか歩いたが、中央広場などいっこうに見えてこないのだ。

かなり大きな街だとは聞いていたが、それほど大きいのだろうか。

その後も黙々と歩き、陽が街についた時より幾分傾いた頃、忙しなく行きかう人々が段々と増え始めてきた。

「いたっ」

誰かの肘がぶつかり、涙目になりながらも歩いていく。隣のミクリもぶつけられたらしく、腰の辺りをさすっていた。

「さっきまで少なかったのに……」

「仕方ないの。ほとんどはこの街の住人。ワシらと違って道を知っておるから、路地を回れるんじゃない。それにほら、もう中央広場じゃミクリが指差すと、確かに前方には開けた場所が見えた。

「あそこですか」

「ちよっと急ぐぞ」

ミクリが速度を上げた。

リーラはしっかりと離れないように、ミクリのすぐ後ろを歩く。人の波を抜けて、大通りを抜けた。

中央広場。

そこには様々な露店が、せっせとお客を獲得すべく、大声を張り上げていた。

「こっちは銅貨三枚だ!」

「ならこっちは二枚!」

「てめえ! 商売の邪魔すんじゃない!」

「お前が引け!」

何を売っているのか、あいにくごった返した人々で見えないが、向かい側からそんな罵声が聞こえた。

とにかく人と露店が多い。

広場自体はリーラの住んでいた村より少し狭い程度の広さ。

けれどあちこちで出された露店のために、全然広い感じがしない。歩くことさえ困難な気がする。

広場の迫力に押されて立ちすくんでいると、腕を引っ張られた。ミクリだ。

「ボケッと道の真ん中で立つな。邪魔じゃろ」

引っ張られるままに広場を進んでいく。

露店同士の作る細い道を縫うように歩き、人とぶつかり、その度に謝りながらも、北大通りの入り口までは来られた。

何故かこの辺りは妙に人が少ない。

「ふぁー、びっくりしました」

「そうじゃの、ワシも少しびっくりした」

ミクリが笑顔で返す。

「それで、こっちが北大通りなんですか？」

「そうじゃ。カルシアに聞いたときから、ろくなことにならんとは思っておったが」

北大通りを睨むように見ている。

明らかにさっきまでの華やかな街と比べて、寂れている。建物自体が古いとか、壊れているということは一見無いようだが、どこことなく暗い。

陽が当たらないというわけでもない。

ただ、人が居ない。

さっきまで溢れかえっていた人だかりは、そこだけが別世界のよう
うに人だかりは見当たらない。

いや、人だかりどころか、人っ子一人見当たらない。

とても同じ街だとは思えない。

後ろを振り返ってみる。

人が大勢いた。

何人かが不安そうにこちらを見ている。

正面に向き直る。

誰も居ない。

「行くぞ」

ミクリが歩き出す。いつでも刀を抜けるよう、構えているように
見えた。

大通りはやはり酷く静かだった。

人の気配がしない。

不気味な雰囲気はただよい、思わずミクリの服の裾をつかんだ。
ミクリが振り返り、目が合う。

にやっと笑われ、慌てて手を離れた。
顔が赤くなるのを感じる。

「……結構大勢いるの」
とミクリ。

「え？ どこに？」

「建物の中とか、路地とか。こっそり見ておるな」

路地を見てみると、確かに人がいたような気がする。

視線をやったとたん、隠れられてしまって、リーラにははっきり
確認できなかった。

「ここってどういうところですか？」

どんどんと不安になってきて、とうとう聞いてみる。

「スラム街じゃよ。まったく、カルシアの好みそうなところじゃな」

「スラム街……？」

「まあ貧乏人の溜まり場じゃと思えばよい。奴らは荒れとるからの、
いつ襲われても不思議ではないの。ほら、こんなふうのに」

ミクリの言った通り、周囲から出てきた男達に囲まれてしまった。
全員がやせ細り、ボロボロの服を着ている。

男達ばかり、全部で十二人。

「何か用かの？」

彼女は一切の動揺が窺えない声で聞いた。

早くも一混乱ありそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362y/>

殺人教会の死神様

2011年11月27日19時53分発行